序文とあとがきから見た
既刊パンフのリスト 2

〜 1 9 9 5 ・ 1 〜

序文

〈序文とあとがきから見た既刊パンフのリスト〉の1にあたるものを93年1月に刊行した時に、その冒頭に記した〈読者の皆さんへ〉と題する表現を再録してみる。

これまで刊行してきたパンフレットの〈序文〉と〈おとがき〉だけを、各パンフの内部への展開方向と三直にまとめてみました。順番は各パンフのうら表紙にこれまで記載してきたものに対応させています。

なぜ、このような〈序文〉と〈あとがき〉だけのパンフを刊行するか？一つの理由は、読者（刊行委を含む）が、これまで刊行されてきた全パンフの流れを把握しなおすのに適しているからです。もう一つの理由は、この流れを今後どのように、どの方向へ持続していくかを刊行委（読者を含む）が提案するのに適しているからです。さらに理由がありうるとして、共に考え、応用していきましょう。

現在の段階でこのような形態の刊行を試みる意味は、いま気付いている以上の情況性や表現ヴィジョンの渦動性にかかわっているのは確かであると考えています。自由に把握や提案をして下さるようにお願いします。

このように記しつつ刊行した時のよびかける姿勢は現在も持続しているのであるが、次の諸点を補充したい。

・これまで刊行してきた流れを把握し、これから進んでいく方向を確かめるために有効な方法であることを実感してきた。読者が仮装的～現実的な刊行委として出現する契機にもなってきている。

・序文とあとがきに注目する視点は、〈ハイネの序文に関する序論〉（表現集1に掲載）の現在的応用でもあるので、関連部分を次のページに転載しておく。できれば全文を再読しつつ、他のテーマに応用していただきたい。

・前号には概念集6の序文（続き）を収録し忘れていたので、おわびと共に2に収録するが、それによって前記のテーマの追求への示唆を得ているので、むしろ収録し忘れたのは何かの配慮によるものかも知れないと感謝している。

・1の刊行後に作成した〈既刊表現の総体と今後の作業方向〉（概念集9に掲載）と〈藤本敏夫氏の生きた軌跡〉（希望者に配布）の最後に記した表現は、厳密には序文ないしあとがきの概念からはみ出すけれども、はみ出すためにも2に収録しておく。

・刊行してきた全パンフを総体として読み返すと、序文かあとがきのどちらかが不可視の場合があり、予測以上にその根拠の追求が重要であることに気付いている。

・～

～一九九五年一月～　　刊行委　気付　松下　昇

〔論集2　神戸大学教養部人文学会〕
昭和41年3月31日発行

ハイネの序文に関する序論

いままで親近した詩人が自分の当面する問題から離れつつあるのを予感するとき、私たちは、はじめてその詩人を総体的に理解し得る最初の契機を手にしているのかもしれない。私が、私たちの意識や戦後史の歪みを描こうとしている過程では、ハイネのことは遠い夢のようにしか思いださないのであるが、私が行き詰っていると、うつろな休息の上に、〈ハイネの作品には、なぜ序文が多いのであろうか〉という疑問が影を落すのである。ハイネが多くの序文を書かざるを得なかった必然性をさぐることによってハイネの表現の本質へ迫りうる一つの道が開けるのではないか。この疑問の双生児として別の疑問がわいてくる。序文という、いわば作品に外接する文学空間から表現の本質に迫りうるのであろうか。もし作品の表現過程が完結性を帯びているのであれば、序文から作品の内容を裁断するのは邪道ではないか。この二種類の疑問をひきずりながら私はいま次のような計画を立てている。ハイネの自己作品に対する批評を系列的に確認すること。また、ハイネという動揺にみちた詩人の表現を序文という、作品外へゆらめき出つつある空間の系列でとらえ、いわば相乗作用によってハイネの特質を見出していくこと。私がハイネの序文群に固執する要因をもう一つかいておけば、さまざまのハイネ論において、序文の引用される度合が極めて多いにもかかわらず、それらのハイネ論が序文そのものの構造の分析にまで突き進んでいないという不満である。それゆえ私は、作品Aの序文→作品A、作品Bの序文→作品B、作品Cの序文→作品C……という方向とは直角に交差するような、作品Aの序文→作品Bの序文→作品Cの序文……という方向をとってみたい。

（中略）

このリストを一応の手がかりとして、ハイネの序文群が無意識のうちにひきよせている問題へ接近してみよう。いうまでもなく、序文は、問題提起の出発点である序論とは異なり、我々の前におかれた作品の冒頭にあるとはいえ、表現過程では、包括の過程として、結果として現われるのであって、決して出発点としては現われない。この確認は、ハイネにおける長い序文の多さ、一八三〇年代前半における序文数の多さ、同一作品に時間をおいて複数の序文を与えている事実と共に、ハイネの特質を論じることの意味を重くしているはずである。私は、ハイネの文学空間の動揺性の検討を個々の作品についておこなう前に、序文という形式をとりながらハイネの意識内部においても生成し崩壊しつつある過程的なものを追求していきたい。そうでない限り、評価の軸を思想におくか表現におくかに関係なく、ハイネの作品論は、私たちの現在到達した段階から、補完的な枠を設定し、ハイネの欠陥を測定するという空虚なものに収斂していくのではないかという危険を感じる。

ところで、ハイネに多くの序文を要求した条件を想定すると、大体次の三つになる。これらは複合している場合が多いのは当然であろう。

一、ドイツ語の作品をフランス語で翻訳出版したとき、またパリからドイツ語の作品を書き送ったときに、フランスとドイツの状況の差を考慮に入れて書く。

二、作品が書かれた時期の発禁・検閲による圧迫や出版者の修正・削除について何年か後に言及する。

三、自己の批評的立場、思想の軸が変化したことを、以前の作品発表時と現時点の関係において表明する。

具体例を追っていくと、まず、一八三〇年の七月革命の後にパリへ移住したハイネは、異国の新しい読者へ作品を手渡しながら、次々と序文を添えている。

（中略）

その要因をいくつか考えてみると、まず、ハイネの資質からいって、本文がつねに未完、断片の傾向を帯びているため、全体を見通せる序文空間に立つとき、全体への統覚が、より強く機能する。また、同一作品が、異なった条件の下で再版される場合も、自己の表現史をふりかえる機会を与えられる。これらの外に、ハイネが状況と内部意識の緊張関係を明確に追跡し、言語の意味が外部の指示にとどまらず、いわば言語の内部に滲透してくるように書きはじめる比率が、序文を書く場合に大きいと考えられる。

（中略）

詩から状況参加の散文へ向かわせたのも、未完の断片的な本文から序文をはみださせたのも、共にハイネのこの根源的な特質に由来している。あるいい方をすれば、ハイネとは静的な抒情を、状況を媒介として、そのことがひきおこす欠陥を半ば意識しながらも、止むをえず運動させていった文学的事件なのである。さまざまな時期、内容、意識の境界線を、分裂しながら走り抜けていくハイネ的な表現主体を、現実過程の歴史と幻想過程の歴史のある交差点が要求し、かれを通じて語りかけているように思われる。

（後略）

序文（荒巻さC）

1〜5の記述（a）や順序（b）や時期（c）にラセン状にもどる作業を開始してみると次のようなことが判ってきた。

①1〜5の総体の任意の項目の記述（a）について現在の位置（c）から読み返す場合の順序（b）には必然的に浮かび上がるものと、自在に移動しうるものがある。

②aの内容もbやcを媒介してより密接な関連を開示してきており、ラセン状にもどるという場合に二重ないしn重にもどる操作が必要になる。

③a〜b〜cへの接近過程は、それぞれの固定した内部への視線と共に、不確定な外部としての未踏の領域を暗示してくる。

これらのDNA遺伝子の二重ラセン構造をも想起させる感触の渦にもまれつつ、かなりの原案を作成してきたが、ふと気付くと膨大な量に達しており、一度に全てを発表できないことを悟らざるを得なくなった。従って概念集6では前記の三点に要約しうるテーマに最も深く関わるものに重点を置きつつ編集し、個人の表現よりは情況の必然から交差してくる何人かの人々の表現を掲載してみた。この方法は概念集5の序文に記した方向性や、6の直前に刊行したパンフ〈6・20討論の記録ー不確定な断面からの出立ー〉のもたらす波動にも対応しているであろう。

疲れて寝ころびながらアメリカのSF作家フィリップ・K・ディックが81年5月に知人にあてて書いた手紙（89年6月浅倉訳）を読んでいると、次のように要約しうる記述が目を引いた。「SFの世界は現実の世界と少なくともある一点で異なっている必要があり、また、その一点は、我々の世界で起こりえない出来事を発生させるのに充分な要因でなくてはならない。この転位をもたらすのは単なる思いつきではなく、社会内部のある重要な概念を転位させた結果の表現であらねばならず、また表現とそれを読む人のショックを感じる際の共同作業が必要である。」

思わず起き上がって考えたのであるが、これは私（たち）が目指している試みを逆方向から示唆的に規定しうるのではないか。私（たち）は例えばSFをつくるために概念の転位を考えているのでなく、この世界は転位した概念によって私（たち）を抑圧していると考えざるをえず、そのような概念の系列がつくりだしている現実と、つまり無意識の〈SF〉世界と私（たち）は戦っているのではないか。この〈SF〉世界は考えつかなくても既に存在し、本を閉じたりスイッチを捻したりすることで消去できない。それゆえにこそ私（たち）の概念集の試みや、それらを媒介する戦いも持続する根拠を持っている。そして、この戦いが少なくともある場合にはSFよりも面白いことはいうまでもない。

五月三日の会通信

訂正リストの配布について

92年5月　松下　昇

70年5月3日に日本独文学会の多数派が大学教員への処分に反対する声明を否決したことを契機として結成された五月三日の会は、処分を引き出した闘争過程に関する情宣と記録を主要な目的として通信を企画し、70年5月の号外、7月の第1号以降81年12月の第26号までを刊行してきている。（現在まで休刊状態にあるとしても廃刊はしていない。）70年代の前半にはかなりの闘争関係のパンフレットが刊行されていたが、後半には殆ど姿を消し、持続的に資料を掲載するのは、この通信だけになってしまった。78年11月から86年7月まで（別の形態ではその後も）私が刊行してきた〈時の楔通信〉も前史としての五月三日の会通信の持続に触発されて可能になっている意味は重要であり、何よりも初期の資料群の掲載という面での五月三日の会通信の重要性は次第に大きくなってきている。これは初期の会員や大学関係の読者よりも非会員、大学には直接の関わりをもたない人々の読者が増えてきている経過からも逆証されている。新しい読者は闘争を過去形でみる立場よりは現在～未来形の立場からの（たんに闘争関係の資料としてのみならず〈作品〉ないし〈表現〉としての）読み方を意図してきているという事実も強調したい。これと比較すれば初期の会員や読者は、そのような読み方から意識的～無意識的に離れてきてしまっているのではないだろうか。私自身も、この通信に限らず、いくつものテーマについて同じ感触があるので、この推定はかなり正確であると考えている。

私は、いくつかの契機と必要から五月三日の会通信を数週間かけて読み返し、多くの示唆をあらためて得たが、同時にかなりの印刷～校正ミスの存在が気になった。作成を開始した訂正リストは15ページに達し、まだ気付いていないものもありうる。それ以上に、それぞれの表現に関わった人や読んだ人の現在の関わり方や読み方を確認したいという考えが強まっている。

訂正リストを届ける方々（特に〈元〉五月三日の会の会員）にお願いしたいのは次の諸点である。

①五月三日の会通信を取り出して読み返していただく。（欠けている号があれば、京大の野村研究室に少部数残っているもの－残部なしの号もある。－ないし松下が訂正記入後マスプリしたものを届けることは可能です。）

②今回同封する訂正リストを参考にして訂正を手元のバックナンバーに記入し、できればリストの補充～訂正を野村氏または松下へ連絡していただく。

③全体ないし任意の表現について現在の感想～批評をのべていただく。（それらをまとめた位相での〈五月三日の会通信〉を刊行することも構想しています。）

追記…前述の〈時の楔通信〉や関連するパンフレット群についても同じ方向の試みをしていく予定であること、および、松下を含む刊行委員会は別紙のようなパンフレットを刊行してきていることを付記します。

序文

いくつかの条件の交差に恵まれて、一九九二年四月二八日に神戸大学闘争に参加した五名が集まる機会があった。この日に各人がいくつかの場所を移動しながら語ったテーマの主要なものを記録し、関連する表現を併合して作成したのが、このパンフレットである。

この出会いはかなりの偶然の要素に規定されている。その位置を、かりに可能な限りの神戸大学闘争参加者に参加を呼びかけた場合のメンバーやテーマの範囲と比較してみることにしよう。その場合には多分、次のようなことが考えられる。

①このような呼びかけ自体の根拠や主体が不確定であり、成立しにくい。

②あえて呼びかけたとしても、メンバーやテーマが92年4月28日以上のものになりうるのは、かなり困難である。

③討論の記録や開示には基本的に異和がありうる。討論の持続についても。

これらの三つの推定をもたらす情況は、たんに神戸大学闘争に限らず、任意の大学闘争を含む〜闘争の参加者についても共通しているのではないだろうか。同窓会的に集まりうる形態がいくつかあることも聞いているが、それらは、闘争や、それに関わった自分を過去形で把握している場合に成立可能であると思えてならない。闘争や、それに関わる自分を現在形で把握している主体があるとすれば、その例外的な主体にとって、集まり討論することは無意味であろう。他の参加〜非参加の全ての人と対立しても提起したいテーマをかかえているのでない限り…。

私は自分が「闘争や、それに関わる自分を現在形で把握している主体である」というつもりも、「他の参加〜非参加の全ての人と対立しても提起したいテーマをかかえている」というつもりもストレートにはない。冒頭に記したような条件に恵まれて参加したというのが最も正確であり、それぞれの参加者にとってもそうであろうと想像する。ただ同時に私を含めてそれぞれの参加者は、「闘争や、それに関わる自分を現在形で把握している主体」であろうとし、まだ不充分にしか開示していないとしても、「他の参加〜非参加の全ての人と対立しても提起したいテーマをかかえている」のは確かであると感じている。

このような意味を、大学闘争のみならず、さまざまの名付け難い過程を潜ってきた人々と共に追求していくために、あえて過渡的な記録を〈神戸大学闘争史〉別冊（1）として提出する。討論記録の原案は各参加者に届け、訂正〜補充や、刊行の是非についての意思表示を依頼したが、合意の応答を得たわけではない。むしろ、ためらいの感覚が大きいといってよい。刊行しないことや、東京での〈一九九一・六・二〇〉での場合のように、討論記録と資料を分離して刊行し、前者は私以外の参加者を媒介してのみ配布することも考えたのであるが、あえて統一的に、私の責任で刊行することにした。理由はパンフの内容から判断していただくことができると考えるし、今後の討論でも深化させ続けたい。

〜一九九二年六月〜　　松下　昇

（追記―このパンフの構成作業の時期と刊行の時期のズレについては、あとがきの註を参照していただきたい。　〜一九九三年四月〜　　刊行委気付　松下　昇）

あとがき

このパンフレットの作業中に、偶然のように次のような要旨の表現に出会った。

「大学紛争によって政府も社会も何一つ変化しなかった。しかし、一九六八年から一九七三年に世界はある境界を越え、それまで支配的であった機構や思想は全て過去のものになった。」

これは、まるで全共闘運動を潜った者の表現のようだが、実はP・F・ドラッカー『新しい現実』（89年7月初版、上田・佐々木訳）の一節である。かれは、この「境界」を主として資本制システムの百年前からの破綻の指摘、それを止揚しえないままの「ロシヤ帝国」の崩壊の予言などを導く人間社会の深層での地殻変動の比喩として表現している。私としては、かれの比喩の壮大さが、個々の存在の内部に凝縮している生理〜幻想〜宇宙性のテーマの危機の反転（対極表現）として把握されるための回路が不充分であるという気はするが、ともかく「境界」の時間を「大学紛争」との関連で認識しうる経済的文明批評家がいることを重視したい。

これを〈未出現のテーマ〉の次の〈あとがき〉の冒頭に置いたのは、もちろん理由があってのことであり、それは次のような提起をしたいためである。4・28の出会い〜集まりに限らず、どのようにささやかな出会い〜集まりであっても、〈大学闘争〉をテーマにしていく場合、語り方の部分性にもかかわらず、テーマは必ず語り手の意識や力量さえ越えて、ドラッカーがいう方向を深化させた〈境界〉の世界（史）性に交差していくのではないか。逆に、〈大学闘争〉などに関心をもたない任意の人が日常的な、また時として世界（史）性の話題に興じている場合にも、語り方の部分性にもかかわらず、テーマは必ず語り手の意識や力量さえ越えて、個々の存在の内部に凝縮している〈大学闘争〉開始後の生理〜幻想〜宇宙性のテーマに交差していくのではないか。問題は、異質に見える双方の語り方の往還と、語る領域とそれをはね返す領域の往還について、この世界のだれも、まだ確かな回路を作り、歩み始めてはいないことである。しかし、マルクスではないが、人間は解決しなければならない問題に気づいた瞬間に、解決への一歩を踏み出してもいる。

〜一九九二年六月〜　　松下　昇

註 ― このパンフの原案は92年6月までに完成し、各参加者に届けていたのであるが、応答の遅れと私の入院のために最終的な刊行が宙吊りになっていた。93年1月以降に、〈 〉的に連続する討論を再開したので、宙吊りの討論記録を神戸大学闘争史・別冊1として、再開後の討論記録を同・別冊2として同時に刊行することにした。対比しつつ読んでいただき、今後の討論に参加していただければ幸いである。

〜一九九三年四月〜　　松下　昇

神戸大学闘争史への補足と訂正

（いくつかの感想のなかで）

神戸大学闘争史（88年5月元社）の出版や運動についての元社の書籍で数ページの追加をおこないながら、今後も継続していくが、読者の批評や指摘に出来るかぎり訂正という面では今回が初めてである。これも継続し、問題テーマの追求や問題パンフの元社から出版していくので意見を寄せていただきたい。

このような読者の批評や指摘に出来るかぎり訂正という試みをおこなう契機となったのは、大学と深い関係ある人々の眼には大学闘争がどう映っていたかを知っていた部外者からの反応であった。ある機会に元社系の一人（以下）人（以下）講演講師）氏が（参議院議員）氏と言葉のやりとりをするようになった。そして、一度だけ、63年5月に須磨の国民宿舎で開かれた労働者学校で出会っていることが判った。直接に話をしたのではなく、同席しただけという方が正確であるが…。（以下が同じような出会い方をしている一人に吉本隆明氏がいる。氏とは60年6月15日の国会構内や、その後61年から63年春まで続いた自立学校で同じ情況を共有していたが、その後の何度かの手紙のやりとり以外は直接に出会って話をしたことはない。）

前記の講演氏から受け取った話やどうせ手紙の一部を次に掲載しておく。

神戸の学部後輩の人々の回想から

（一）学生運動の経験を媒介して

いつもニュースありがとうございます。今度は「言いたい」の松下昇さんは言葉少なにと思いました。私はアンド、革共同のなかで記憶に残る人です。

（略）

1965年5月から8月まで、兵庫県労働者学校をもちました。講師は、竹中さん（革共同関西書記長）北方一郎さん（いがはしりません）前田保さん（国鉄の労働者）浜野芳夫さんで学生は東地区の労働者、松下昇さん、水戸殿さんを覚えています。水戸さんとは、よく話しました。松下さんは寡黙でした。友人が、横田さんの九州の谷川雁を訪問した話をルポにした文章を読んだだけでした。松下さんは、吉本隆明の編集した「試行」に短い物を書いていたので、私も沈黙していました。樺美智子さんが好きな人は、松下さんでした。と、これも死んだ、柴田道子さんから聞いたことがあったようです。これは漠然としています。それから「造反教官」で新聞にのりました。ニュースで名を見て感動しました。熱い言葉でも意味があります。　では元気で。92・11・2。

（部一の手紙の一部）

あとがき

固有の連続的な過程（ここでは神戸大学闘争史）について、発語（討論）形態で現われてくるテーマを、一つの視点ないし方法で記録〜言語（文字）化していく場合の困難さをもう一度くぐり直そうとする試みが、この別冊（2）の作業の基本であった。現段階で、この試みを構想した理由の基本をいえば、

これまで刊行してきたパンフ群の残部がなくなりかけているためのマスプリ作業（a）や反応に対処しつつ、それぞれの続篇を企画していく作業（b）などのために、身体的〜生活的困難さは別としても、かなりの期間にわたって新しいパンフの作業（c）が不可能になるという予測があり、かつ、どの作業についても、神戸大学闘争に交差している条件を再把握しなければならないことは自明であった。さらに（c）については次のような本質的な問題もあった。

刊行委の一人（松下）の作業、とくに概念集シリーズの展開が、内容的にも、かなり自在に可能になっているけれども、もし、このままそれに集中し続けると、かなりの長期間にわたって前記の、特に（a）、（b）の作業に取り組む契機がなくなるであろうし、それは、表現主体にとってだけでなく、読者にとっても安易な傾向を内包してくるのではないか、という反省があり、あえて（c）の対極にある作業への迂回路をとってみたのである。迂回路こそが（c）や、いま想定しえない何かへの最短距離である可能性もひそかに予測しつつ…。

一応の作業を終えて振りかえると、この迂回路は何通りもあり、無数の資料群や無数の関連テーマないし反応の拡がりとの関連からいえば、海岸の砂粒の一握りしか提出しえていないな、という反省もあるのだが、しかし、まず自分の手で差し出してみるのが不可欠であると考えた。この意味では、闘争史の別冊（1）や（2）は、今後いくたびも戻ってきては取上げ、差し出していく（n）の過程の断片にすぎないのは勿論であり、この素材や方法を参考にして、読者のそれぞれが、闘争史に限らず任意のテーマについて同位相のものを構想しはじめていく契機になれば、今回の試みは意図の基本を達成しているといえる。多くの人々の共通する作業との出会いや相互の再構成〜総合などへの期待が、このパンフの不充分さに関する苦痛を癒してくれる。

〜一九九三年四月〜　　刊行委　気付　　松下　昇

既刊表現の総体と今後の作業方向

全生活〜表現過程の基底にある作業の一つとしての刊行について、これまで刊行してきた表現群の総体と今後の作業方向を素描してみる。

松下　昇（についての）批評集

国家による批評としてのα系－α篇（88年10月）をα1、α続篇（89年6月）をα2とし、今後もα3、α4、α5、…、αnを予定。

マスコミによる批評としてのβ系－β篇（87年9月）をβ1、β続篇（88年9月）をβ2とし、今後もβ3、β4、β5、…、βnを予定。

個人による批評としてのγ系－γ篇（4分冊、87年11月〜88年3月）をγ1、γ2、γ3、γ4とし、γ続篇（88年11月）をγ5とし、今後γ6、γ7、…γnを予定。

（また、批評集のα系、β系、γ系の総体のそれぞれの批評に関して、

反α1、反α2、反α3、…、反αn

反β1、反β2、反β3、…、反βn

反γ1、反γ2、反γ3、…、反γn　を予定。）

表現集〈　〉版（88年8月）を表現集1、続篇（88年12月）を表現集2とし、今後も表現集3、4、5、…、nを予定。

発言集〈　〉版（88年9月）を発言集1、続篇（88年12月）を発言集2とし、今後も発言集3、4、5、…、nを予定。

神戸大学闘争史―年表と写真集―（89年5月）を持続的に更新しつつ、資料や討論記録を別冊1（93年4月）、別冊2（93年4月）として刊行してきたが、今後も別冊3、4、…、nを予定。

〔3・24〕証言集・上巻と下巻（89年12月〜90年1月）に続いて、今後もこの事件や他の事件についても予定。

菅谷規矩雄追悼集（90年10月）、続篇を予定。

東京の教員救援連絡会が刊行した救援通信最終号（91年5月）を討論素材とする〈6・20討論の記録―不確定な断面からの出立―〉（91年10月）の続篇を予定。

五月三日の会が刊行してきた通信1〜26（70年7月〜81年12月）の全バックナンバーについての訂正リスト（92年5月）、それを踏まえて全バックナンバーを対象化するパンフの刊行を予定。

時の楔通信第〈0〉〜〈15〉〜号（78年10月〜87年9月〜）および多数の関連パンフの訂正リストと全バックナンバーを対象化する第〈　〉号を予定。

概念集1（89年1月）、2（89年9月）、3（90年5月）、4（91年1月）、5（91年7月）、6（92年1月）、7（92年3月）、8（92年11月）、〜

（既刊の構成〜項目を任意の視点から再構成〜補充していく実験も予定。）

序文とあとがきから見た既刊パンフのリスト（93年1月）、続篇を予定。

すでに内容を把握してきた人々には感受されているであろうが、個々のパンフの区分は過渡的なものであり、かつ、ある集合の形態は他の全ての集合の形態と区分されていると同時に全てを内包してもいる。

これら全ての既刊ないし企画中のパンフは何かへ向かって深化ないし飛翔し、既成のイメージないし形式からはみ出していく過程にある。この動きに参加し、応用する人々の一人でも多いことを願う。そして、たとえ私が身体的な条件などでこれらの作業を展開することが困難になった場合にも、それらの人々が仮装的かつ本質的な刊行委メンバーとして作業を持続していくことを切望する。

〜一九九三年五月〜　刊行委　気付　松下　昇

註—既刊のパンフレットは、時間の経過にもかかわらず（あるいは時間の経過と共に）、全号についての入手希望者があり、これまでも手元にある残部がなくなったもののマスプリを必要な機会ごとにおこなってきた。ミスプリントの訂正、読みにくいページの原本による鮮明化なども。刊行の種類の増加により、この作業もかなりの比重をもってきているのは勿論であり、現段階では前記の新しいパンフの企画に対応させつつ同時におこなう必要があるので、この面での作業への読者諸氏の参加〜共闘も求める。

また、87年〜88年の印刷は、元〜一〇三出版〜（岡山大学学友会内）でおこない、かなりの残部があるが、89年以後の刊行委（いくつもの場所に拡大）からおこなってきた元〜一〇三出版〜参加者の活動方針に対する提起、それへの未応答のままの連絡条件の宙吊りにより、87年〜88年に印刷された残部が有効に活用されないまま〈冬眠〉している。しかし、この宙吊りを逆用〜転倒しつつ、対応する範囲のパンフレット群について当時は視えていなかった拡がりから再構成し、この方法を前記の宙吊り情況を含む〈宙吊り情況〉の総体へ応用しつつある。

序文

〈既刊表現の総体と今後の作業プラン〉のレジュメ（このパンフ3ページにも掲載）を作成したのは、87年段階に開始した作業が何かを一周して再びラセン状に〈同じ〉位置にきているのを確認したからである。新しいサイクルの作業を持続しようとする場合にも、6年前と同様に、松下　昇（についての）既成表現群の対象化から開始することになるのも何かの必然であろう。これは、自分や情況にとって最も切実な表現を展開する場合には同時にその行為自体を私から最も遠い〈自分〉から確認しておくこと、いいかえると、かなり自在に表現できる場や方向が見えているとしても、それが困難である対極の自分の位置を迂回し、〈私〉を普遍化・交換可能にしていく方法〜原則が不変であることからきており、このような方法〜原則から作業してきた数年間に、次のような感触を獲得してきている。それは、特に批評集の系列についていえるのであるが、私たちの刊行の企画が松下昇を軸とする大学闘争の総括〜応用に視えるとして、確かにその方向を内包しているけれども、本当は、それは一つの不可避の契機であるに過ぎず、闘争への関係の多少〜有無に関わりなく全ての人に問われているテーマを取り出しつつあるということである。

5ページ以下のγ系批評の統一構成リストを例として、このことを考えてみるが、その前に少し註をつけておく。このリストは国家（α系）、マスコミ（β系）以外の諸個人による何かの形で松下を批評対象とする表現を含む。ところで、資料群を分析すると、松下の発想や文章を自分の発想や文章に応用している場合を（a）とすれば、文章の中で引用〜言及しなくても、松下の発想や文章を自分の発想や文章に応用していることが明らかであるもの（b）、松下らの活動を契機として出現し、その存在自体が批評であるような刊行物や表現目録パンフ（c）…という表現位相のズレがあるのに気付く。しかし、ここではaを主軸とし、bの二、三の例を加えるにとどめ、cはaに影を落とすレベルでのみ扱うこと い、本格的には別の場所（今後予定している反γ系パンフのメディア論など）で扱うことにした。この視点で5ページ以下のγ系批評の統一構成リストにもとづく批評群を概読してみると、あなたにも次のような無意識の批評が湧き上がってくるのではないか？

*1 なぜ松下は、これほど長期に、かつコンスタントに、また多岐にわたって論じられる対象になるのか…

*2 なぜ松下を論じる人の中に、評価の変化が現われ、しかも自らの破綻に気付かないでいられるのか…

*3 個別の批評主体が個別の松下を論じているというより、論じる関係の総体が複素数性の〈　〉論をしているのではないか…

*4 γ系の対象化によりα系、β系などの特性がよく視えてくるし、それらについてもγ系でおこなっているような統一的把握が必要ではないか…

*5 このような批評の関係の把握は任意の他のテーマに応用可能ではないか…

*6 〜

これだけでも、問題のZ系の作業が見かけ以上の質を帯びていることを感じる素材になりうるし、一方では大学図書館自体の蔵書としての作業を可能な限り徹底に行い、また見ない人々に手渡していく必要性を私たちは今いっそう痛感している。

さて、Z1～5の作業と、これからの作業は基本的に共通へ通底しているとして、差異は何か？Z1～5では、詩のない所に微かな詩すじを必死につけようとする作業が中心であったが、今後は、詩すじ自体の他の詩すじや地形との関連、歩き方や作業に対する反応を含めて対象化していかねばならないことが差異の最大のものである。別の図式化が出てくるとはいえ、やりがいもある。

〈詩すじ自体の他の詩すじや地形との関連〉は冒頭で言及したレジュメや、このパンフレット以外でも追求し続けるとして、このパンフレットでは、この作業を読者と共に再開していくのに役立てることを意図して、個々の蔵書にできる限りの詩をつけた。

これは今後刊行予定のα、β、γ、δの各批評に対する本格的な反批評のトレーニングであるが、それらの射程は、個別の（とりわけ、否定的な批評をしている）相手にあるのではなく、自分を含めた言語へ偏差の総体の発生源を繋ぐものであり、個別の反論は次の段階の場へ向かう過程で不可避になる場合は別として、戦略的には（とりわけZ系に於いては）、自分を含めた言語へ偏差の総体の発生源を繋ぐものであり、そもそも、α、β、γ、δの批評系の総体が、はるか以前に不要になっており、（はじめて）私たちとの〈共闘〉表現であり、〈パン〉の材料である。このような転倒へ応用の方法によって、様々の歴史上の多くの殉死した先行者たちが死後〈無言〉になってから、やっと評価されはじめるという悲劇を繰り返すことも矢張られ始めるであろう。

私たちが今後おこなっていく作業の目的を先ずのキーワードを包括するように提示してみると、次のようになる。

① Z系の総体の位置や意味を対象化しつつ、そこに個々の主体を横断へ包括して無意識的にせよ示される表現的な可能性を生産の他のテーマや関係に応用していく。

② Z系の表現主体が陥っている錯誤がどこからきており、どのように止揚可能かを、また それらの人々が論じえていない〈　〉領域を示唆しつつ提起していく。

③ Z系に限らず、私たちの刊行作業の過程と内容が、見かけを遥かに超える何かをめざしていることを読者と共に確認し、獲得へ実現していく。

〈一九九三年九月〉

詩集Z6～7刊行委員会　気付　　松下　昇

序文

この序文は77の冒頭に置かれてはいるが、76と7を作成する作業の最終段階に表現されており、76と7に関する〈あとがき〉であると同時に、76と7を媒介する〈橋〉でもある。

作業の過程で70年代末のマンガ「こまわり君」に再会したので、その一つを掲載してお くが、これはなかなか示唆的である。ケンカした夢を見た者同士が出会って、それぞれ自分の夢の中では相手をふくろだたきにしたと主張する。こまわり君は、「よーし　じゃあ

これから　ここで　ひとねむりして　夢の中で決着をつけよう」といって、ほんとうにねてしまう。そして、西条くんは、「せいぜい夢の中でケンカしてろ　ぼくは　これから

おまえをじっさいに　ふくろだたきじゃ」といって終る。実際にふくろだたきにする場面はない。描かなくても意味は充分に完了しているし、描いてもマンガの中にしか過ぎないことを作者が熟知しているためであろう。

ペンによる批判や反批判の場合も、たしかに、これまでは、自分の文章や発言の中でだけ相手を攻撃し、自分の立場を維持して終っているのが通例である。また、雑誌の企画による論争原稿の交互掲載や、TV局の主催による徹夜討論も、個別バラバラの文章・発言の並列より活性的な面があるとはいえ、任意の対立者の全てに開放された方法ではない。私ならば、論争の時間や方法を当事者の全員で共同管理することを参加の条件にするから雑誌やTVなどのメディアも（大学や裁判所と同様に！）私を追放するだろう。

私は論争にも〈ふくろだたき〉にも関心はない。やれば無敵だとは思っているが、そのような行為自体の〈コップ〉の中の嵐性をこそ対象化し、超えようとしてきた。批評集や討論集会の企画も、その意図で展開してきている。まだまだ不充分であることも自覚しており、本質的な指摘や提起には耳を傾ける姿勢を深めていきたい。いま私の耳にはかつて菅谷規矩雄氏が関心をもったブレヒトが亡命中の反ファシズム闘争の過程で書いた詩の中の「あとから生まれるひとびとに」の一節が響いている。これはγ系の対立のみならず、より広い対立にふさわしいと考えつつ野村修氏の訳を参考にして引用すると、

「とはいえ、ぼくたちは知っている。
憎しみは、下劣なものにたいするそれですら
顔をゆがめることを。
怒りは、不正にたいするそれですら
声をきたなくすることを。」

ブレヒトは、このように後の時代の人々に、内省をこめて書き残しているが、私は、この声を発しつつ同時に聴き取る、重層的な過程を生き、表現していきたい。個々の対立者との関係ではなく、全領域の対立や分岐を発生させる要因への追求を深化させ、擬制としての〈コップ〉自体を破壊し外へ出ていく時に多少は〈耳ざわりな音〉を立てながら…。

〜一九九三年九月〜　　刊行委　気付　　松下　昇

松下昇（についての）

批評集γ系・統一目次

γ篇1～4（87年11月～88年3月）、γ続篇としての5（88年11月）の目次を基本とし、この期間までに存在していたが未確認ないし未収録であったものを、この期間以後に出現しているγ系表現と共に統一的にリスト化し、

――――――――――には＊印を付けて、γ6の13ページ以降に掲載する。

1 松下　昇　「山本元するとやくそく」（エンピツとクレヨン書き）43年6月・γ5
2 菅谷規矩雄　「記録者の幻想」　暴走13号　63年6月・γ1
＊3 試行出版部　「試行小説集『序曲』新刊広告」　試行15号裏表紙　65年10月・13
4 佐々木幹郎　「〈黙秘〉の受肉」　同志社詩人6号　69年6月・γ1
5 中野晴文・橋本　要「大学闘争の中で自己を発見した」アサヒグラフ69年7月・γ1
6 北川　透　「反戦後的情況への楔」　週刊読書人　69年8月・γ1
7 吉本隆明　「情況への発言」　試行28号　69年8月・γ1
8 赤木真澄　「〈　〉のむこうにあるものは何か」　〈メタ〉3号　69年11月・γ1
9 佐々木幹郎　「黙秘の受肉」　現代詩手帖　69年11月・γ1
＊10 神戸大学教養部学生自治会「松下＝全共闘糾弾」（ガリ刷りのビラ）70年1月・14
＊11 森川佳津子　「新たな持続への総括を」（ガリ刷りのビラ）他　70年2月・16
12 菅谷規矩雄　「詩的情況論序章」　ユリイカ　70年3月・γ5
13 滝沢克己　「神戸大学教養部・湯浅光朝　教授会各位あて書簡」　70年3月
（万年筆書き、70年6月ラディックス2号に収録）　γ5
14 折原　浩　「神戸大学教養部各位への抗議ならびに要請」　70年3月
（万年筆書き、71年中央公論社「人間の復権を求めて」に収録）　γ5
15 菅谷規矩雄　「斜面にへばりつく猿でないなら人間として直立せよ！」70年3月
（ボールペン書き、73年2月菅谷規矩雄表現集に収録）　γ5
16 菅谷規矩雄　「〈松下〉処分粉砕総決起集会への発言」　70年8月
（ボールペン書き、73年2月菅谷規矩雄表現集に収録）　γ5
＊17 花田映子　「内に仮装する結社」（ガリ刷りの論文集）　70年夏？・18
18 佐々木幹郎　「戦闘への黙示録―〈松下昇〉序説」　犯罪　70年9月・γ1
19 野村　修　「松下講師の処分」　京都大学新聞　70年9月・γ1
＊20 佐々木幹郎　「日付けなき《祭り》」　構造　70年10月・21
21 飢餓群団　「戦闘宣言」など　《前史》（1）　70年11月・γ1
＊22 水崎嬰子　「ある視座からふりかえって」　同前　70年11月・23
＊23 野村　彰　「《もの言う》苦痛について」五月三日の会通信4号　70年11月・24
24 北川　透　「松下昇表現集について」　松下昇表現集　70年12月・γ1
＊25 北川　透　「松下昇表現集・発行のためのノート」あんかるわ26号70年12月・25

26 佐々木幹郎　「70年アンソロジーについて」　現代詩手帖　70年12月・γ1

27 赤瀬川原平・他　「現代論壇考」　現代の眼　71年1月・γ1

28 佐々木幹郎　「水の楽器ーわが〈法廷〉」　辺境3号　71年1月・γ1

29 森崎和江　「『松下昇表現集』を読む」　日本読書新聞　71年2月・γ1

30 中井隆久　「オレの墓銘碑は"拒否（ノン）。」　朝日ジャーナル　71年2月・γ5

31 村尾建吉　「白夜通信（刊行宣言）」（手書きコピー）　71年3月

後に、あんかるわ26号に転載　γ1

32 池田浩士「写実劇『第一回公判』（一幕四場）五月三日の会通信5号71年3月

後に「似而非物語」（72年9月序章社）に収録　γ1

33 加藤典洋　「不安の遊牧」　現代の眼　71年3月・γ1

*34 東畑　明　「憑人の詩（つかれびとのうた）」（ガリ刷りの詩集）　71年3月・26

35 菅谷規矩雄「（松下の起訴状への）求釈明書」（ボールペン書き）　71年5月・γ5

36 菅谷規矩雄「研究者の文学的頽廃（1）」（ガリ刷り）　71年5月・γ1

37 天沢退二郎「松下昇ー不可能の表現者」　現代の眼　71年5月・γ1

38 滝沢克己　「『松下昇表現集』を浮む」　ラディックス4号　71年6月・γ1

39 北川　透　「〈水平線〉」　茫々亭通信4号　71年6月・γ5

40 鉄（コラム署名）「〈表現運動〉と自立誌」　日本読書新聞　71年7月・γ5

41 菅谷規矩雄「松下処分に関する人事院審理への発言」解放学校通信　71年7月・γ5

42 〈　〉幸治「〈六甲〉からの無限の遁走」　岡山救援通信13号　71年7月・γ1

43 金本浩一　「吉本隆明＊松下昇への諸註」メタ20号～27号71年7月～72年4月・γ1

44 岡田　啓　「遠い夢（松下昇）への覚書・1」　有時1号　71年7月・γ1

45 岡田　啓　「遠い夢（松下昇）への覚書・2」　有時2号　71年12月・γ1

46 南山大学仮装被告～仮装被処分者団　「《宣言》」（ガリ刷り）

同時に南山大学新聞に掲載　71年12月・γ5

47 折原　浩　「いくつかの問題提起」　五月三日の会通信8号　72年2月・γ1

48 滝沢克己　「折原氏の問題提起に想う―『相互批判の確実な基礎』を求めて」

日付け得ない〉71・11・28〈をめぐって（パンフレット）72年3月・γ2

49 池田浩士　「〈松下昇〉はパンをいかに食うべきか」

五月三日の会通信10号72年5月

後に『似而非物語』（72年9月序章社）に収録　γ2

50 岡田　啓　「〈仮装組織論〉への問いかけ」　有時3号　72年5月・γ2

51 亀矢東西　「夜夜題談から昼昼肛炎」（ガリ刷りのチラシ）　72年11月・γ5

*52 上原孝仁　「風の極刑を撃て・後書」（詩集）　72年11月・30

53 北川　透　「〈証言〉の根拠」　あんかるわ32号　72年12月・γ5

*54 赤瀬川原平・他　「大日本民主帝国論壇地図」　現代の眼　73年1月・31

55佐々木幹郎「日常性をめぐって」（座談会）　詩学　73年2月・γ2
＊56野村修・池田浩士「大学教師の闘争と表現」（対談）日本読書新聞　73年3月・32
＊57小川正巳　「大学の中の大学」　第2次原点2号　73年4月・37
58浅野利昭　「市民の暦（10月16日の項）」　朝日新聞社　73年8月・γ2
59池田浩士　「支配者の〝総括〟を超えるものを」　情況　73年8月・γ5
60折原　浩　「東京大学―近代知性の病像・あとがき」　三一書房　73年11月・γ2
61北川　透　「証言あるいは〈六甲〉へのノート」1～6日本読書新聞74年1月～6月・γ2
その後～に収録？
62菅谷規矩雄「天沢退二郎＝序説」　『詩的60年代』（イザラ書房）　74年9月・γ5
＊63吉本隆明　「情況への発言」　試行41号　74年9月・39
64芹沢俊介　「〈批評の原理〉と〈批評の運命〉」　磁場4号　75年2月・γ2
65松下昇公判調書出版会　「〈　〉裁判あるいは〈　〉闘争の現情況について」　75年2月・γ5
66堀田　穣　「神戸大　松下昇氏の場合―六甲風光案内」　救援　75年4月・γ2
67佐々木幹郎　「詩が作者をさがす」（1）～（2）　現代詩手帖　75年6月～9月・γ2
68滝沢克己・荻原　勝「往復書簡・思想の原点を問う」ラディックス　75年7月・γ2
＊69桶谷秀昭・月村敏行　「思想と自然」（対談）　伝統と現代　75年9月・40
＊70北川　透　「月村敏行への手紙」　あんかるわ42号　75年10月・42
後に『詩的メディアの感受性』（85年5月未来社）に収録
71宮内　康　「鉄格子の大学から」　公開自主講座「大学論」　75年10月・γ2
＊72京大教養部ドイツ語教室会議メンバー　「自主ゼミ論」　同前21号　76年3月・43
＊73神戸外大生協組織部　「大学へのプレリュード」　新入生歓迎号　76年4月・46
74北川　透　「詩と批評の闇渠（同時代覚書）1
―〈芸〉の論理批判からはじめて」現代詩手帖　76年4月・γ2
後に『詩的火線』（79年6月思潮社）に収録
＊75友田清司　「未宇ちゃん！」（悲報）　（ボールペン書き）　76年4月・47
＊76藤原正好　「未宇ちゃん〈哀歌〉」　（ボールペン書き）　76年4月・48
＊77清水早子　「〈闘争史〉講読料の応用についての提案」　76年5月・49
＊78上原孝仁　「ある死生に触れて」　『渦層』（ガリ刷り詩誌）76年6月・50
＊79北川　透「あるプリズム（小さな死者についての報告）」あんかるわ42号　76年8月・52
後に『詩的メディアの感受性』（85年5月未来社）に収録
80墨岡　孝　「未完の組織・不可視の組織―松下昇論―（Ⅰ）～（Ⅳ）」
詩の世界6号～11号　76年11月～78年6月・γ2

81 浅野利昭　「現代人物辞典（松下昇の項）」　朝日新聞社　77年3月・72

82 菅沢邦明　「書評・ドイツ語の本」　指　77年6月・75

＊83 能勢伊勢男　「映画を上映するにあたって」岡山大学祭パンフレット　77年11月・53

＊（参考資料ー松下と荻原のハイネ論・64年〜65年）　54〜55

＊84 雨之路　薫　「新編建築思想辞典・〈神戸〉の項目」　店舗と建築　78年5月・56

85 西沢朝登　「政治の中の行動考〈Ⅲ〉」　乾坤4号　78年6月・72

佐々木幹郎　「巡礼ーエルンスト『カルメル修道院へ入ろうとしたある少女の夢』より」　現代詩手帖　78年9月・73

86 間　章　「時代の未明から来るべきものへ」　イザラ書房　78年12月・73

＊87 高本　茂　「大阪日仏センターの本質」（パンフレット）　79年3月・57

＊88 篠原静閑　「玄関先にて」（手書きの詩）　79年春　・58

後にワープロ版『さようなら詩集』（89年）に収録

89 五十嵐良雄　「大学教師の虚像と実像」（座談会）　現代の眼　79年5月・73

90 瀬尾育生　「裡面の河ー松下昇『六甲』をめぐる覚書」（上）・（下）

現代詩手帖　79年9月〜10月・73

91 Klaus Briegleb　"Literatur und Fahndung"　Carl Hanser Verlag　79年　・73

＊92 高橋秀明　「地下広告」　喰蠟野巣VOL・2ー1　80年1月・59

93 自主ゼミ実行委員会　（83の試訳）

「あるドイツ文学者の闘争とハイネ論」　京都大学新聞　80年9月・73

＊94 芝本　爽「『革命』と叛《革命》メモ」同志社大学法闘委・総括論集　81年2月・60

＊95 荻原勝・能勢伊勢雄「共同性の地平を求めて」続編シナリオ（対談）　81年3月・70

＊96 芹沢俊介・『恋涯』同人　座談会テープの原稿化資料（コピー）　81年4月・74

＊97 季節編集委員会　「安保闘争資料と『先駆』について」　季節　81年5月・75

98 高橋秀明　「松下　昇ノート（1）」　《第三領域》3+号　81年5月・73

＊99〜103 被告団〜「映画を媒介して大学闘争にふれることは可能か？」

乞食通信第11号　81年7月・76

＊100 村尾建吉「現象の家族論　あるいは　研鑽的方法の陥穽」〈白夜通信11〉

82年3月・80

101 高橋秀明　「松下　昇ノート（2）」　《第三領域》5+号　82年5月・73

102 宮内　康　「日録」　日本読書新聞　82年6月・75

103 小川正巳　「虹の橋への祈り」　匙6号　82年9月・73

104 安田　有　「作業ノート」　作業4号　82年12月・73

105 星を見たい人　「永続する大学闘争〈1〉」　神戸大学新聞　82年12月・73

106 山本　聖　「永続する大学闘争」　〈門司大里教会〉月報　82年12月・75

107 高橋秀明「4・11討論をめぐるメモランダム」《第三領域》6+号　83年4月・73

＊108矢野正俊「『異邦人』の〈いま〉」（1）　試行61号　83年9月・83

＊（参考資料一時の郷通信第〈3〉号　81年10月）　84

109池田浩士「全共闘残党派が『遂に戦取!!』した」批評精神5号　83年10月・73

110山本　聖　「未知なるものへの祈り」　〈門司大里教会〉月報　83年10月・74

111兵頭正俊　「ゴルゴダのことば狩り」　大和書房　84年8月・74

112北川　透　「わが執着われら難破船―『あんかるわ』の二十二年」

未来（宣伝用パンフレット）84年6月～12月・74

113野原　燐　「〈あやとり〉への註」　市9号　85年1月・75

114松下竜一　「記憶の闇」（Mへの言及部分）　文芸　85年2月・74

後に同じ題名で河出書房新社から85年に刊行

115山崎一夫　「戦後革命運動事典・松下昇の項目」　新泉社　85年3月・74

116野原　燐　「ゲーテルの拘置所」　九州2号　85年7月

＊117徳永省三　「私の来歴　または　松下昇論」（ワープロ表現）　85年夏　・88

118上原孝仁　「跨線橋まで」（往復書簡.Ⅳ）　詩集　85年9月・74

119野原　燐　「北川　透への手紙」　九州2号　85年12月・74

＊120山本　聖　「死者から／へのまなざし」〈門司大里教会〉月報　86年10月・89

121竹中まい　〔3・24〕事件の絵　（エンピツ書きの差し入れ）86年4月・75

122竹中とき　〔3・24〕事件の絵　（エンピツ書きの差し入れ）86年4月・75

123高堂敏治「自在なる詩想の器―『あんかるわ』小論」面シテ16号86年7月・74

＊124高堂敏治「感受性の冒険者・北川　透」　風琳堂　90年6月・91

125宮内　康　「楽しげなスクウォッターたち」　住宅建築　87年1月・74

126みき　ゆうこ　「迷夢」（ワープロ表現の詩）　87年6月・74

127みき　ゆうこ　「祭りの後」（ワープロ表現の小説）　87年7月・74

128北川　透　「社会的存在としての詩とはなにか」（瀬尾育生との対談）

『北川　透　全対話』風琳堂　87年8月・75

129竹中みな　「ねずとさんのにもつ」の絵　87年8月・75

130竹中未知　「みうさんのかお」の絵　時の郷くの人からの通信87年9月別冊

131田木しげる「特集《60年代詩をめぐって》のアンケートについて」

オーバー・フェンス11号　87年10月・75

132（氏名非公開）「〈Xデー問題〉の発端をなす行為」

岡山大学学友会事務室　87年11月・75

133北川　透　「修羅シュシュシュ　菅谷規矩雄との一交渉史一面」

現代詩文庫「菅谷規矩雄詩集」（解説風琳人論）　87年11月・75

＊134野原　燐　「わかりやすい69年」（ワープロ表現）　88年1月・92

（以下のページ数は77についてのものである。）

＊135松下昇「〈松下昇（についての）批評集をめぐる討論集会〉について」
88年1月～93年9月・5

136友田清司「松下昇批評集をめぐる討論集会に寄せて」　88年2月・75

137野原　燐「狭くない共同性とはなにか」　88年7月・75

＊138荻原　勝「出会いの時」（パンフレット）　88年12月・7

＊139北川　透「十年の〝ユメいずこ？―ニセのキリストよりニセのニーチェを……」
あんかるわ81号　89年10月・10

＊140久住幸治　「北川　透にひとこと」　風通信NO・8　89年11月・12

＊141中島　誠・他「こんな文化人はいらない」（座談会）新雑誌X　89年11月・13

＊142五十嵐良雄　「風化せずに生活者であること」　新雑誌X　89年12月・14
後に『世紀末ニッポンの教育論戦』（社会評論社90年9月）に収録

＊143野原　燐　「北川　透のために」（ワープロ表現）　89年12月・15

＊144村尾建吉　「北川　透に関する註」　〈白夜通信〉無言録3　90年1月・17

＊145佐伯庸介　「〈無言録〉3註記…雑感」（ワープロ表現）　90年1月・19

＊146村尾建吉　「北川　透に関する註」　〈白夜通信〉無言録5　90年7月・20

＊147五十嵐良雄「権力を揺るがす真実に迫ったルソーと松下昇」
新雑誌X　90年7月・21
後に『世紀末ニッポンの教育論戦』（社会評論社90年9月）
に「松下昇『概念集』の重さ」と改題して収録

＊148村尾建吉　「高堂氏への手紙」　〈白夜通信〉無言録6　90年10月・25

＊149五十嵐良雄「今年の執筆予定」（アンケート）　出版ニュース　91年1月・26

＊150山本光代　「菅谷規矩雄と松下昇」他　彷書月刊　91年2月・27

＊151久住幸治　「『概念集』・4人の感想」　風通信NO・13　91年4月・28

＊152永里繁行　「自主講座の宗教的場での応用」
土曜〈学校〉通信第〈1〉号　91年5月・30

＊153北川　透　「ラジカリズムとモダニズム」（インタビューに答えて）
ようよう6号　91年9月・31

＊154山本光代　「日本のサドでは…?!」　風のたより（古書籍通信）92年春　・32

＊155永里繁行「表現の一方性とは？」土曜〈学校〉通信第〈6-3〉号　92年9月・34

＊156徳永省三　「松下昇『概念集』を読んで」　92年10月・38

＊157五十嵐良雄　「自己喪失・志喪失の時代に三人の教育思想家に光を見た」　39
＊158同前「大学教授になる方法……？」　（158～160は90年～　41
＊159同前「立場を問い、前提を問い、闘うこと」　92年の新雑誌Xの各号に　42
＊160同前「『紅衛兵の時代』と全共闘の時代」　掲載後に161と共に刊行）　43
＊161同前「解説」　後に『教育カルトの時代』（92年10月現代書房）に収録　44
＊162徳永省三　「概念集8および菅谷規矩雄追悼集を読んで」　92年11月・47
＊163山谷鬼子　「鬼瓦私記録・註」　92年12月・48
＊164藤本敏夫　「ほうふ」（詩）　原詩人通信No・48　93年1月・49
＊165友田清司　「コピー端会議について」　ひかりだより　93年3月・50
＊166渡辺信雄　「『菅谷規矩雄追悼集』について」幻想時計NO・5　93年4月・51
＊167同前　「寄稿者（松下）プロフィール」　同前　同前　51
＊168同前　「ふいに死者が」（詩）　同前　同前　52
＊　（参考資料－松下昇「『ふいに死者が』について」93年5月）　53
＊169高橋秀明　「松下昇論（1）」　BIDZ創刊号　93年4月・54
＊170垣口朋久　「『否定性』から未知へ」　BIDZ創刊号　93年4月・59
＊171同時代建築研究会　「ワードマップ　現代建築」あとがき・補記　新曜社　93年5月・71
＊172加藤健次　「詩誌月評」　現代詩手帖　93年6月・72
＊173高尾和宜　「黙」（小説のワープロ原稿）　93年7月・74

註

次の連続的刊行物からのγ系批評はできる限り掲載したが、全部ではないので、これらについては、できればバックナンバーの総体を把握していただく方がよい。それぞれ希望者への回覧等は可能。

なお、起訴状が松下の表現を『黒板に「く」の字形十二個を書き』、『「六甲空間は世界を包囲する」と書き」、「～を投げ付け…」という風に記述する場合（α）やマスコミの報道（β）も松下の行為を含む表現への批評であるのは勿論であるが、それぞれα系、β系の批評として別のパンフで対象化しつつあるし、今後も補充していく。また、神戸大学教養部広報などの松下批評は、公務としておこなわれているためαに入れる。これらのα、β、γ、～の総体について読者と共に反批評を深化させ続けたい。

試行（谷川雁、村上一郎、吉本隆明。11号以降は吉本隆明）1号（61年9月）～72号（93年5月の予告はある）～

あんかるわ（あんかるわ同人。15号以降は北川透）1号（62年8月）～84終刊号（90年12月）

〈メタ〉（赤木真澄・他）1号（69年10月）～44号（74年7月）

RADIX（滝沢克己・他）1号（70年2月）～8号（76年11月）

岡山救援通信（片山恵子）1号（70年4月）～30号（73年8月）

五月三日の会通信（野村修・他）1号（70年7月）～26号（81年12月）

「伝習館」を考える大阪の会（白鳥紀一・他）1号（71年6月）～110号（90年6月）

白夜通信（村尾建吉）1号（71年3月）～12号（72年3月）

〈白夜通信1〉（75年7月）～〈白夜通信22〉（87年4月）～（〈白夜通信25〉）

〈白夜通信〉無言録1（89年5月）～9（91年6月）

浮遊の戦後（村尾建吉）1（91年8月）～8（93年8月）～

有時（岡田啓）1号（71年7月）～6号（78年5月）

〈解体新書〉通信（菅谷規矩雄）1（71年12月）～8（73年5月）

大学教員救援通信（宮内康気付大学教員救援連絡会）1号（76年7月）～28最終号（91年5月）

時の楔通信（松下昇～未手）〈0〉号（78年11月）～〈16〉号（87年7月）～時の楔〈の／からの通信（87年9月）～

〈門司大里教会〉通信（〈0〉号～〈3〉号は山本聖。〈4〉号～〈17〉号は山本聖とU・シェーファー、〈18〉号以降は山本聖、永里繁行）〈0〉号（80年3月）～〈≈46≈〉号（93年9月）～

恋涯（垣口朋久気付編集委員会）創刊号（80年5月）～2号（89年12月）～

《第三領域》（高橋秀明）1（80年6月）～7（84年3）～

同時代建築通信（宮内康気付同時代建築研究会）1号（83年3月）～20号（90年6月）～終刊号準備中

～一〇三通信～（～一〇三被告団～）〈0〉号（83年4月）～〈6〉号（85年9月）～号外（86年11月）～

風通信（久住幸治）1号（86年4月）～13号（91年4月）

無限光通信（久住幸治）1号（91年11月）～4号（93年3月）～

霹靂（浜本多恵子）1（87年1月）～2（88年1月）～

土曜〈学校〉通信（永里繁行）〈1〉号（91年5月）～〈6〉（93年3月）～

表現の重心―序文の位相で―

どのような表現にも重心に相当する個所があり、いくつかの表現の集合である本ないしパンフレットにも重心に相当する個所がある。しかも、それぞれの重心は表現主体の意図に応じて位置づけられるとは限らず、位置のありかに気付くことが困難な場合さえ多い。勿論、この重心の存在は、表現したり読んだりする場合に不可欠の条件であるとはいえないのであるが、表現過程や表現内容が、たんに表現したり読んだりする関係のレベルを超えて具体化している以上、ある表現の出現は、現在の段階で自明と認識されているレベルを超えて意味づけられうるはずであり、この意味づけに際して前記の重心の位置づけは、一つの大きい測定基軸になりうるであろう。

こういうことを考えたのは、概念集9は1～8の次の周期にある特性からだけでは了解しがたい出現の仕方をしていると感じるからである。仮装的に別のいい方をしてみると、概念集9は、松下の〈死〉後に、刊行委が残されたメモやフロッピーディスクを整理してまず目についたフロッピーディスクからの表現を開示する位相に対応している。それぞれの表現は、いくつかの領域ですでに発表されているものではあるが、統一的に構成してみると、個々の表現だけを読むのとは異なる意味も発生してくるようであり、しかもどのように異なるかが充分には把握しえない感触があり、それが前記の〈重心〉の発想に交差しているのである。

もしかしたら、概念集9の〈重心〉は可視的なページの次元からはみ出したところに位置し、生成し続けているのかも知れないことは、まだ殆ど手を触れていないメモ群や存在の軌跡からも想像できるし、それをこそ把握し提出すべきではあるが、しかし、その方向への手掛かりを、たとえ〈重心〉から遠い余技の領域からであるとしても、〈重心〉の概念と共に始めて提出することに重要な意味がないとはいえないであろう。生と死の、表現と未表現の〈重心〉を、この厳しい情況の中で真に潜り抜けていこうとする人々の共闘を得つつ発見し応用していきたい。

～一九九三年十一月～　　刊行委　気付　　松下　昇

あとがき

講演集9総体の位置や今後の方向については巻頭に記した通りであるとして、個々の表題に関わる問題については同じ長会でパンフ化し続けることが因縁であると考えられるので、個々の読者の質問に応じて可能な限り伝えていくことにする。

そして、その上で、問題が最も不確定であるが、最も緊急に全ての読者に伝えておきたいことを引き続き記すことにする。

〈責任と任意〉の項目にすでに記しているが、私の任意は不確定であり、私の責任性は任意より決起にある。これは、苦しい被抑圧的立場ではあるが、主体的な〈業〉重力の感覚のもとで捨てがたい。ここで発見していくテーマは必ず後で改めて報告していくことを約束する。ともあれ読者諸氏には、今後の松下ないし松下気付刊行委への連絡は、こちらからの連絡があるまで一時中断して下さるようにお願いしておく。

一九九三年十一月八　　刊行委　気付　松下　昇

序文

概念集9は、このシリーズの、身体的～居住的な危機の渦中からの最後の号になる可能性もあったのだが、危機をとりあえず乗り切りつつある現在においても、9が私の表現系列総体の転換～転生を意味している事実は不変である。いま、一つの奇跡のように概念集10を提出する根拠を記してみると、

①概念集1の構想が生じた経過に同時代建築研究会の「ワードマップ　現代建築」の企画への参加があったことは、これまでにも何度かのべたが、概念集9～10の段階では天王寺公園に関する集会に参加しており、この時に出会った人々との交流の位相で概念集の構成が変化しているのを自覚している。この変化の深さは、あえていえば、概念集1の構想がない段階から、はじめて構想へ跳躍する瞬間の変化に対応している。変化の兆候は9の刊行後に作成し始めた項目〈公園は何の喩か〉が（続く）となっていることにも暗示されているし、10の最初の項目への連続を、その後にある〈ふしぎな機縁から出会っている人々へ〉と共に把握すればより明確になるが、ここから発する表現論的な特性を抽出すると、

既刊のパンフレットの総体を提出～配布するのではなく、まず既刊のパンフレットの総体のリストと今ての概念集の目次（項目）だけを提出～配布してきている。これにより、受け取った人の希望に応じて無数に可能な、その人用のパンフレットを作ったり、各項目への共同補充作業や、未出現の項目（および刊行形態・応用方法）の共同追求作業の可能性を切り拓いた。具体的な展開の詳細は展開の特性からも均一に把握～公開できないけれども、出現しつつある巨大な意義は推測していただけるであろう。

②しかし、考えて見ると、前記の方向は潜在的には、これまでの過程においても絶えず提起し実行してきてもいるのであり、より意識的～実践的に具体化しつつあるというのが正確である。その場合、次の点を強調しておきたい。

〈公園〉を媒介して出会ってきた人々の多くが最初に持った「この文章は難しそうだ」とか、「共同の補充・作成作業など無理だし、ヒマもない」というような先入観が次第に減少し、同時に、これまでの刊行主体の非力さや限界がよく視えてきている。この感覚は相互に、自分では処置の施しようのなかった傷ないし症状が手当され治癒していく時の感覚に似ている。まだまだ時間と工夫を必要とするとしても、この体験を深めつつ共同で表現していきたいし、できれば、まだ具体的に出会っていない様々の領域の人々が深く病んでいる症状の回復にも役立てていくつもりである。

③以上から基本的に明らかなように、概念集10に対応する表現は複（素）数的に出現しており、ここに提出するものは、生成し運動しつつあるそれらの断片ないし断面に過ぎないのであるが、この方向を提起してきた主体の一人としてまとめて見た。生成し運動しつつあるそれらの総体に出会いたい読者は、自分の試案をたずさえて刊行委へ連絡していただきたい。

～一九九四年三月～

刊行委　気付　　松下　昇

あとがき

この概念集は10ではなく、…の位相からもnというべきであるが、その質は、これまでの全ての号に内在しているので、通常の号数と異なる号数を経由してきていることを前提し、nの10という意味で10とした。これは表紙ないし10の内容への註として記しておく。

9との連続性では、9のあとがきで予告していた〈住居〉テーマの経過報告をまずおこないたい。93年末のタイムリミットを媒介して展開したのは、まず、

①賃貸契約関係の背後にある問題の公開的な討論

②賃貸契約関係自体が変換可能であるという指摘

③賃貸契約関係の持続の方が不況に対して有利であるという分析などで

これらの包括的な展開、特に①の公開性、③の示唆を踏まえた②の具体的提案（居住は持続したままの旧家主から新家主への売却）が効果を発揮して、今後の一定期間の居住は可能になっている。

ただし、あくまでも、一定期間であって問題の本質は未解決のままである。しかも、問題の本質という場合、たんに賃貸契約関係に限定されないことは勿論である。

住居の問題の本質は、それを可視的な指標とする生存の仕方や、諸関係の止揚の仕方の一環としてのみ把握しうるし、この把握の方向は、たんに私に関してというよりは、全ての人々にとっての、社会〜国家〜生理〜環境との〈契約関係〉の破棄〜再構成の条件の追求に連続しているのであるから。

それゆえ、93年末のタイムリミットを媒介して展開したのは、たんに賃貸契約関係の当事者たちとの交渉だけではなかった。社会〜国家〜生理〜環境との〈契約関係〉の破棄〜再構成の条件の追求を念頭において生活し、友人たちのあたたかい配慮により、この列島に散在するいくつかの住居〜活動場所を（ただちに移転はしないとしても、配慮への答礼をかねて）巡礼した。実際の、また実質的な無数の〈ホームレス〉たちとのふしぎな共感の稜線をたどりつつ。この巡礼過程は持続しているし、多分生きている限り持続することになるであろう。たとえ外見からは一定期間これまでと同じ連絡先で私と連絡可能であるとしても、本質的には、無数に拡散〜流動している不確定な連絡先の一つが、これまでの場所であるに過ぎないことが確定しつつあるのであるから。

付記－一定期間すみ続けてきた場所を、これまでと違う関係ないし視点から把握する体験を読者にとっても喚起していただくために記すと、私の場合は、戦争の少年期に見た焼け跡、処分発表後の大学構内、出所直後の監獄の門などである。そして、この感じを自分の生き、表現してきた軌跡についても投影してみたい。すでにそうしてきているのであるが、より本格的に主体〜対象をどこまでも拡大〜深化させ続けたい。

〜一九九四年三月〜

松下　昇

表現集3

序文

一般的に連続する数字の番号をつけられた刊行表現の内容は、発表時間順に配列されていることが多いが、表現集に関しては、かなり異なる様相を呈している。

1は〈あんかるわ深夜版〉（71年1月）を基礎としつつ、そのコピーを仮装する〈 〉版として88年8月に刊行し、2は直後の88年12月に1に収録されていなかった表現（a）と、1の刊行以降に出現した表現（b）を対象化する方向で刊行した。従って2の（a）の中には、1の刊行以前の表現も含まれている。

3においては、この方向を更に持続〜展開しようと試みてきたのであるが、量的な条件から、60年をはさむ表現（a）の二つを収録するだけになってしまった。ただし、量的な条件は大きいとはいえ、本質的には、前記1〜2でおこなった方法を、より徹底して、他のパンフレット系列の総体との関連において展開したい、という意図の具体化であり、この意味では3が例外的ないし偏差を帯びているというよりは1〜2の方向からの必然である。また、内容的にも、3に収録したものは今後の私（たち）の表現や刊行の活動のために、現在の時点での刊行が最もふさわしいことに3を一読する読者が気付いていただけるであろうと希望をこめて予測している。

一九九四年四月　　刊行委　気付　　松下　昇

表現集3

あとがき

刊行作業の軌跡に重点をおいて把握するのは、刊行委にとっても読者にとっても重要であるのは勿論であるけれども、本当は次のことこそが核心にあるのだと、あらためて自分にいいきかせるようにしてのべると、

表現集3に限らず、これまでのパンフレットの総体についていえるのであるが、一つの表現が出現する場合、それが文字として具体化されているとしても、必ずしも他者に届ける位相にはない。この表現集3に収録した論文でさえ。確かに論文である以上、審査する人を意識してはいるから他者に届けているのは事実であるとはいえ、私のいいたいのは、この場合には不可避的な手続きとして提出している要素が大きく、自分と読者の対等で自由な関係の媒介としていくには遠い表現である、ということである。結果的に、いくらかでも自分と読者の対等で自由な関係の媒介としていくことができているとしても、この遠さの感覚を失ってはならないと考えている。いいかえると、私がこれまで提出してきた表現は、可能な限り自分と読者の対等で自由な関係の媒介としていくことができるものを目指してきた。不可避的な手続きをしいられる場合には、そのしいられ方を必ずどこかで転倒しようとしつつ。

もう一つは、論文とか、小説とか、詩とか、ビラというようなジャンル区分を突破しようとしてきた。とりわけ69年の闘争以降そうであるが、この姿勢は、それ以前から確立されていたし、時間と共に姿勢の必然性を確信してきている。ジャンル区分への異議は、この世界の全ての制度～概念への異議や再検討の姿勢と連関しているのは勿論である。その場合に次のことに深く自覚的でありたい。すなわち、自分がジャンル区分を超えようとして表現しているものが形式として例えば論文に類似してきたり、ある誤りとみえるものの批判の仕方の中に批判対象と無縁でない誤りの傾向に気付くことに。また、このような試みの総体が、私たち総体にとっての言語～意識～存在の制約と、どこでどのように衝突しており、それとどのように格闘したり逆用していくかということにも。

まだまだ、いいたりないとは思うけれども、あとがきというジャンルからはみだしつつ以上を記しておきたい。

一九九四年四月　　刊行委　気付　　松下　昇

発言集3

記述・発語の二分法を超えて

（序文の位相で）

これまで刊行してきたパンフレットについては、何となく、発言集シリーズは、私の発言の記録をパンフレット化したものを意味しており、それとは対比的に、私が文字として発表したものが表現集としてパンフレット化されていると想定している読者が多いかも知れない。

しかし、それぞれのパンフレットを厳密に比較すると必ずしもそうではないことが明らかになる。表現集に発言の記録が収録されていたり、始めから文字として発表されたものが発言集に収録されていたりする。これは、それぞれのシリーズの1に相当するものが70年代の私の共闘者によって構想〜公表された経過によるものであり、その後、この経過を踏まえつつ包括〜止揚して2を刊行してはきたが1の原形が持続的な影響を残しているためである。包括〜止揚作業の詳細は、それぞれの1〜2の序文を参照していただきたい。

表現集3と発言集3を刊行するに際して、それぞれの方向性や位置を再検討する必然に出会っている。その場合、表現集3の刊行時よりも発言集3の刊行時に、再検討の必然を強く感じていることは重要である。この差はどこからくるのであろうか。文字〜活字〜コピーのレベルとの関係において、表現集の場合は、かなり自然に原表現からパンフレットへの移行が可能であるのに対して、発言集の場合には、発語がテープなどに記録された後に、その一部が文字〜活字〜コピーのレベルに交差するためにさえ、かなりの労力を必要とするという落差に由来すると考えられる。いや、テープなどに記録されたものの一部という以前に、全発語のごく一部がテープなどに記録されるに過ぎないのであるから、この落差は二乗ないしn乗されていくと把握した方が正確であろう。

以上の考察は、刊行作業の範囲で開始されているが、この機会に、より普遍的な考察へ飛翔したい。そこで、刊行作業とは一たん〈無〉関係に、〈記述表現〉と〈発語表現〉の関係、それぞれを記録〜開示する方法の差について考えてみる。

〈記述表現〉（a）と〈発語表現〉（b）の関係については等価であると仮定する。一般に、（a）は（b）よりも記録されやすいためもあって重視されてきた。特に国家や社会の権力〜契約関係においては（a）が重視され、（b）はせいぜい補助的にしか価値を認められていない。しかし、人間の表現の価値は記録しやすさとか保存しやすさを基準に逆規定されるべきではなく、表現の衝動〜必然として等価であり、その全的解放の方向で把握すべきではないか。私たちの刊行作業においても、（a）、（b）の区分を既成の常識的レベルで企画すれば、（a）は現在までの形態でいいとしても、（b）は録音テープないしビデオフィルムを複製して配布するか方々へ出かけて再生したり朗読することによって（a）との対称性を維持しうることになるであろう。しかし、私たちは、この方法をも必要に応じて展開するとしても、より本質的な（a）－（b）の構造へ迫りたい。

〈記述表現〉（a）と〈発語表現〉（b）のそれぞれを記録〜開示する方法は、とりわけ（a）についてはワープロ、コンピュータ、ファックス、コピー機など、（b）についてはテープレコーダー、ビデオなどの技術文明の発達によって飛躍的に容易になりつつあり、記録〜開示する困難さの差も減少してきているとはいえる。しかし、表現が生起するレベルで把握すれば、具体化しえない内的困難さの他に次の点への注目が不可欠である。

①任意の人の全生活過程について生起する〈記述表現〉（a）と〈発語表現〉（b）を比較した場合、圧倒的に（b）の範囲と質・量が大きい。いくらか飛躍していえば、この差への注目と応用は表現論のみならず革命論に密接に関わっているはずである。

②（a）と（b）のそれぞれを記録〜開示する困難さの差が技術的には減少してきているとしても、その技術を用いる目的、関係が全ての人に対等に位置づけられていることが実現する度合でのみ技術の使用をプラスと評価できる。

③発言と表現は明確に対称的に位置してはいず、不確定な波動の中にある。私の体験では

X－〈情況への発言〉はマジック・インキで書いて掲示板に張り出したが、その後、何段階にもわたって筆写〜活字化されたものの一つが表現集に収録された。

Y－〈落書き〉はマジック・インキやペンキを用いる文字〜記号として表現したが、そのままの形態ではパンフレットに限らず、どのような媒体にも収録不可能である。

Z－法廷における発言は、証人として採用されている場合の他は速記録されず、むしろ法廷警察権行使の対象となった。

以上を踏まえて過渡的に次のように提起してみる。

〈記述表現〉（a）と〈発語表現〉（b）を対比的・静止的に把握せず、〈声〉を軸とする、ある主体の空間的な他者や関係に対する一瞬の生理的表現ないし姿勢（A）と、（A）を時間的な他者や関係のために持続化する媒介としての記号化〜構成〜複製（B）が、各主体の表現行為の垂直交差軸であり、絶えず（A）－（B）の形態や領域を交換しつつ、各主体相互の交換・対等性を無意識的にせよ求めて波動している、と把握すべきではないか。

私は既成の詩には関心がないが、詩は記述される以上に朗読（発語）にふさわしいし、詩が生活過程のさまざまの場で朗読（発語）され始めれば微かに世界は動き出すと予感している。勿論、本当に動き出すためには、記述や朗読（発語）を超えて詩を生きることが不可欠なのであるが…。詩はどうでもよいとして、前記の（A）－（B）が主体内部や各主体相互において不均衡ないし固定していれば、それは打破〜解放すべきではないか。また、この作業に役立つ技術や関係の他は全て廃棄して、ゼロから出立する試みが必要ではないか。

（＊次のページ右の註へ続く。）

一九九四年五月　　刊行委　気付　　松下　昇

註

1―録音テープないしビデオで「正確に」記録していない場合にも、写真と絵の差異を踏まえて討論記録を作成することに意味があることは、〈一九九一・六・二〇討論の記録〉や〈神戸大学闘争史〉別冊1・2からも逆証されていると考えている。

2―〈証言集〉のあとがきで、証言プランの力点の三項目の最後で、「準備した後に集積する言葉と、準備せず、ある瞬間、ある場で思いかけず訪れる言葉の差異の力学を法廷外の全領域へ応用していく試み」にふれていることを、あらためて想起している。微かな前進しかなしえていないけれども、前記の1や発言集3は、この試みの具体化でもある。

作品に現われた発語
（あとがきの位相で）

批評集7の最後に収録した高尾和宣「黙」は、86年3月24日の裁判所法廷における事件を主軸として69年以降現在までの私たちの軌跡や問題点を対象化しようとした意欲的な作品であり、共同表現としての方法的位置からも、今なお生成し続けている表現であるが、これを発語、とりわけ松下の発語の描写の視点から考えてみる。登場人物の一人でもある松下や〈 〉闘争に関する描写はかなりの比重を占めているにもかかわらず、発語の記述は四百字×六百枚の作品の中に二箇所しかない、と聞いて、すぐに信じられる読者は少ないであろう。しかし、そうなのである。これは作者（とくに高尾氏）の非力を示すのではなく、逆に発語の重要性を直観的に正確に把握していることの証拠である。

その部分を次ページ以降に引用してみるが、批評集γ篇7に収録した数ページ、できれば作品総体の中で読んでいただきたい。

傍線をつけた二箇所―①「申し立てを審理せよ。」、②「そうですか。」―のそれぞれは、もし発語されたものの記述だけを発言記録として把握するという方法をとるとすれば極めて短く、足しても一行にも満たず、まして一冊のパンフレットないし作品の素材にはなりえない。その構想さえも生じないであろう。この二箇所は、それを支える描写（背景や関連の記述）によって生命を獲得していると同時に、その描写に生命を与えている。ここでは、発語と記述は相互に様式を支え合っている不可欠の渦の表層の区分である。さらに、①と②はどちらも発語としても規定できるが、ある意味で対極にあるといえる。権力の文書（例えば制裁決定書）は、①を「発語」（暴言？）として記録しうるが、②を記録することは技術的というレベルを超えて不可能である。そして、①と②の向こうにある未出現の表現の根拠を発語～記録しうる主体こそが、既成の法体系や文学体系や～体系を解体しうるのだと、あえていっておきたい。そして、この分析によっても、序文で記したような記述表現・発語表現の二分法と固定化は表現の本質の展開から遠いことが示されているであろう。問題は、そうであるとして、今後私たちが、どのように記述表現・発語表現の二分法と固定化を超え、かつ、それぞれの可能性を深化～変換させつつ、この世界を変革する登場人物として生きるかであり、その方向を読者諸氏と共に追求していきたい。

一九九四年五月　　刊行委　気付　　松下　昇

「蘇」　　高橋三郎

（前段）

ひとりなく裁判官がなにかボソボソと言った。時間にして十数秒…

きっと聞いそこねたのだ、「…〜控訴人〜終了〜四・二八〜…」だけでなにか何かその内容はもっと聞き取れなかった。上を向いて、口じゅうをもごもごさせた。まるで言い訳をしたあとのように見つかりうろたえて言い訳でもするような姿だった。

ほんの少しのザワつきはあったがみんなは、なんかいってる。と、思って聞き流すだけ、つぎになにが起きるのか待っていた。

と、裁判長は黙って立ち上がった。二人の陪席判事もそれに従って立ち上がった。左の陪席判事から、その時、五十秒前に入ってきた左手のドアに歩きその時出ていった。

みんなはただその姿を見ていた、黙って。傍聞につめよっていたみんなもあっけにとられていた。なにが起こったというのか？いつもなら閉廷と同時に被告が「起立」と号令をかけるのに、当惑をなくした彼ひとりだけ黙っていた。最後の裁判官席の椅子がわからない書記官が、急に訪れたひとりの空白の長い時間に固まっていた。彼にしてみれば長れをなくして裏上を振り返るなんていうことまでせず、慌てていた。他のみんなもなにが裁判官にもいったのかわからず、ただ見るだけ。みんなそうだった、なにがあったのか、なにがどうなっているのかしらと、見られていた。

当事者がエエッ、なに？どうなったの？とザワつきかけた。それと時を同時。右の陪席判事が最後に出かけると、

当事者たちが、大きな声で「なにや？」、「どうなってんの、裁判長、今、なんていったの？」、「聞こえた？」、「いや」と話しだし、だれかがククッ、と笑った。

「主文を朗読せよ」

松下さんがいった。いつもどおりの普通の落ちた声。裁判官の姿がまったく聞き取れなかったから、ぼくにはこの落ちた声ははっきり聞こえた。

（略）

法廷内はただ流れていった酒バックの会話に飲み込まれてでもいるように言葉を失っていた。不思議な緊張が流れるだけで、別にヤジとかあるような言葉もなく、騒然としていなかった。ぼくも裁判官たちの消えていく姿と酒バックの言いた放物線の残像を同時に頭のなかに描いていた。みんなも似たりよったりで、とにかく唖然としていた。

（略）

そのうち、視界から警備員が消えて、背広の職員が増えた。五分、七、八分…また警備員があらわれた。彼らの様子が違っていた。さっきまでは、威圧するように睨んでいたのに、視線が合うのを避けていた。緊張している。

ぼくは給水テラーのほうへ水を飲みに行った。エレベーターホールのところまで行ってあの殴った警備員が連れ去られたほうをみた。十五、六人の警備員がいた。ある者は軍手をしていた。カチカチと鳴る靴音に気がついた。みんな保安グツにはきかえている。

二日書記官が控室から出て、馴れ馴れしい男がぼくに話し終わってまなしに、西の廊下でぼくらから離れていた職員が小声で、「拘束の用意を…」と言うのをぼくは耳にした。聞かれないように話しているハズなのに、耳に入ってきた声。話し終わった声の余韻を追っかけて、ぼくの耳が勝手にそっちへ反応する。拘束だって…拘束の用意だって…背広の男はクルッと背中をみせた。指示を受けた職員が急ぎ足でエレベーターの前を右折して消えた。

いよいよ始まった、と思った。体温がわずかに上りはじめた。連中は「拘束の用意を」と言った。きっと会員というわけではない。だが、狙っている。ことの展開ではぼくも拘束されるかもしれない…いや、連中の狙いは松下さんだ、また、松下さんが拘束される、去年に続いて、また松下さんが…

聴いたことを控室の松下さんに伝えた。いつもの声よりも低い声で話した。

「そうですか」と答えた松下さんは日常茶飯事のことのようにすこし微笑んだ。松下さんにとっては、拘束される空間もこの控室も特段のちがいはない、ということなのか。

「違法だぞ」と、＜違法な機関から＞言われなければ、もう確たる未来にまでとどく表現としては一文の値打ちもない、ということなのか？そう思うと心中穏やかならざるものがあった…

だが、ぼくのわずかに昇っていた体温が松下さんの表情で、また平静にもどった。廊下のイスに座った。静かに深呼吸した。廊下の空気が薄く透きとおっていく。

見ておかなければ、いつかどんな形にしろ証言するときがくるから、ちゃんと確認しておかなければ…複雑な感覚で座っていた。

（後略）

解説ないし註をはみ出しつつ…

94年春　　松下　昇

このリストは年譜という概念からはみ出している。ふつう年譜は、ある人の死後に、その人に関心をもつ人が追悼の意思をこめて作成するが、〈藤本敏夫氏の生きた軌跡〉は、（a）生前に、より自覚的に氏や私たちが生きていくために作成している。また、（b）絵でいう肖像画的スケッチや、文学でいう自叙伝ないし伝記のための個人的・付随的な作業としてではなく、藤本氏や私たちが氏の生き方を各人の生き方を測定するための鏡として共同で作成されており、永続的に補充〜更新されていく過程にある。

この（a）と（b）は〈藤本敏夫氏の生きた軌跡〉の作成作業における重要な特性として記しておく。私の活動との関連でいえば、（a）は、私に関する国家やマスコミや個人の批評を私の表現群と共に死後にだれかがまとめてくれるかも知れないという乏しい可能性、他者依存性、参加不可能な閉鎖性を打ち破り、それらの（死んだ未来の）作業や（死んだ過去の）素材を、生き、闘っている現在に引き寄せて闘争や表現やパンに変換していくという試みを藤本氏について応用していく試みであり、（b）は、表現主体というものは単独であり、その主体が記述する表現は絶対であるという既成の固定的な文字表現把握を超えて、テーマの追求に関わる任意の人が作品構成に対等に関わりうる、という〈第n次作品〉論（概念集4参照）を藤本氏について応用していく試みである。そして、藤本氏について（a）と（b）を応用することを必然とする魅力が藤本氏にあることを氏の人柄や表現に直接ふれる全ての人が了解されるであろうと私は確信している。また、読者が、今は主として私がおこなっている作業を引き継ぎ、充実させ、多くの他の人やテーマに応用していって下さることを期待している。

リストの原型は、93年末から現在まで、私が藤本氏の手紙や作品を参考にして作成し、藤本氏やご家族、知人に何度か確認して再構成〜補充をおこなってきており、今後も持続していく。本来ならば、詩および絵を中心とする藤本氏の作品のできる限り多くを収録したいのであるが、量的な条件もあるので、今回は、私が最も藤本氏らしさが現われていると思う詩と絵のいくつかだけを掲載するだけにし、その他のものは希望者に回覧する。できれば総体のパンフレット化に共闘していただきたい。

今回の作業をすすめながら考えたことを最後に記すと…

藤本氏の生涯は、一人の人間が潜りうる時代や場所の振幅の多彩さを考えさせる。戦前と戦後の対比は勿論興味深いが、戦前においても家出、古本屋の店番、人夫などの位置から社会を見ており、平均的な市民、まして特権的な政治家、学者、文学者の視点と対比的である。戦後においても、炭鉱～山村～都市での共産党員としての活動、60年安保を契機とするブント～革共同への移行と同時に宗教（天理教）への関心を持続させてきており、一般的な政治活動家との大きい対比がある。。このことは、逆にいえば、戦前～戦後を潜った任意の人の軌跡を把握する際に、また、宗教や人間存在の問題に殆ど取組み得なかった政治思想・組織の軌跡を把握する際に、藤本氏の軌跡が重要な測定基準になりうることを示している。

ただし、藤本氏自身は、自分が重要な測定基準になりうることは想定しておられないであろうし、私からの「これまで一番つらかったことは何ですか」という〈インタビュー〉の問いに対する（脳梗塞の後遺症により発語が困難なので）ワープロのキーを媒介しての答えにあるように、「自分は、ただ楽しいこと、とくに人や本と出会う楽しさを求めて生きてきただけです。」といわれるであろうが、しかし、この態度こそが、大多数の人々の拘束されている情況を踏み超えることを可能にしたのであり、大多数の政治的～思想的指導者の決して提起しえない〈革命〉の条件、少なくとも前提条件の一つであるといえようが、そのように堅苦しい方向との関連は今は無視してもよい。むしろ、藤本氏の、前記の答えを含む生活思想はどこから生じたのであろうかについて考えたい。

手紙の往還や〈インタビュー〉から気付いたのは氏の幼年期の環境である。兵庫県の日本海に近い山々の間を流れる川に沿って細い道が続き、日に一度やってくる郵便配達の人は手紙を媒介して外部から夢を運んできてくれる魔法使いであった。そのルートを逆にたどって、どこまでも外部へ出かけていくことも可能に思われた。このような環境は氏の資質を一層深め、見知らぬ他者や表現への憧れ、共通感覚への信頼は今も持続している。

このような資質が、上昇指向と無関係に成長したことも重要である。少年期のエピソードへの態度で印象的なのは、小学校の学芸会でスサノオノミコトに殺される大蛇の8匹目のシッポになった経過を楽しく回想していることである。上昇指向を持っている子ならばこんな役をイヤがるであろうし、今ならば学校へ怒鳴りこむ過保護の親もいるかも知れない。この役を喜んで引き受けた藤本氏は武装した古代の征服者に対する原住民の対応を想起させるが、その同じ人間のその後の政治的飛躍を考えると、何か楽しくなってくる。藤本氏の生家もそうであった天理理教など非「世界教」の原点には、この原住民性が息づいていることも指摘しておきたい。抑圧され、排除されているものたちへの藤本氏の共感は一貫している。不自由な身体であるにもかかわらず、毎朝、久子さんに手を引いてもらって12階の住居から降りて付近に集まって待っているノラネコたちにエサを運ぶ行為に込められている情念は、全世界を変革しようとするブントの初心に通底しているはずである。

（訂正リストの〈まえがき〉部分）

時の楔通信・訂正リスト

各号の刊行ごとに、それまでの号について発見したミスプリなどの掲載をおこなってきてはいるが、何箇所にも分散していて全号をまとめて読む場合には不便でもあるので、既掲載分を切り取って統一的に編成しなおし、あらたに発見した追加部分と共に掲載する。

既掲載分の後半から＊や☆（または★）の印が現われるが、＊は刊行後に原文の誤記に気付いたことを、☆（または★）は刊行後に訂正ないし補充したことを示す。時の楔通信の刊行を持続している段階の印刷工場の労働者諸氏が、ミスプリの多さ（と訂正リストの掲載）に恐縮しているので、誤記や校正ミスについては私の方に責任があることを示し、かつ表現過程のテーマを相互に深める媒介にしていくために、この記号を使用して歓迎された。その後ワープロを使用することにより、原文作成と印刷作業を自分で統一的におこなっているが、ワープロが訂正や構成変換に便利であるという技術的側面に無自覚に依拠することによっては見過しかねないテーマ（とりわけ表現に異なった位置で関わる作業者内部のテーマ）に、すでに時の楔通信刊行の段階で踏み込んでいたこと、それ故に多くの発見（とりわけ、前記の表現を、さまざまの行為や関係へ応用すること）も可能になってきたのだと、このリストを作成しながら、あらためて気付いている。

第〈0〉号（78年11月）から第〈15〉号（86年7月）の前史と後史に関わる「時の楔―〈　〉語に関する資料集―」（78年10月）と「時の楔への／からの通信」（87年9月）はそれぞれ別の印刷所から刊行したが、これらについても訂正リストを作成し、併合する。いうまでもなく、ここに提出する訂正リストの総体は完結したものではなく、読者諸氏の共闘を得つつ持続的に更新～補充していく。表面的には自己の非力に直面することをしいられる作業ではあるが、自己目的としてではなく、次の作業の前提として開始する場合には充実した作業になりうることはのべておきたい。このテーマに関連して〈あとがき〉でも展開しているので、統一的に把握していただければ幸いである。

一九九四年六月　　時の楔通信　気付　松下　昇

☆または★についての註―第〈15〉号の段階で☆を原文に記したが★と印刷され、校正の時に少し驚いたが、意味は共通であるし、ネガ性も面白いので訂正しなかった。

訂正リスト作成過程をかすめるヴィジョンの断片の補充…〈訂正〉リストを作成するためには〈誤記〉を再度掲載しなければならない。また、作成中の〈訂正〉リストにも今は気付いていないが、記述にとどまらない〈誤記〉がありうることに気付いていなければならない。しかし、このヴィジョンは、それぞれ私を、なぜか楽しい気分にさせてくれる。

時の楔通信・訂正リスト（94年6月）

あとがき

訂正リストを提出する理由を考えてみると、たんに刊行してきた表現を正確な資料として残したいという比重からだけではなく、あるまとまりをもつ表現群の総体を、刊行段階とは別の視点から再把握する場合の準備作業として開始している比重の方が大きい。刊行段階とは別の視点から再把握するという場合、眼の前にある表現それ自体として再読するだけではなく、眼の前にある表現を基礎的な（しかし変換可能な）座標系としつつ、膨大な関連資料を再配置〜再検討する媒介として把握し始めている。

一例として、ある事件の経過の記述を資料iについてn行おこなっているとする。i以外のii、iii、iv…を引き寄せて記述の変化がどのように生じるかを考えたり、n行を部分とする資料の総体のパンフレット化のプランを挙げることが可能であり、81〜82年に再開された人事院審理（特に仮装証言）に関して、この作業がすでに進行中である。

また、訂正という作業自体の表現的〜情況的意味の追求も持続させていく。この追求はすでに時の楔通信を刊行している84年段階に開始し、概念集の刊行過程で89年に再提起しており、それぞれ現在の私たちの作業進度を測定するために、次ページ以降に再録した。

すでに、それらの中にも提起として内包されているのであるが、この機会にあらためて記すと、時の楔通信の訂正リストは、その表現様式の固定化のためにではなく、そこからの飛翔のエネルギーをつくり出すためにこそ提出されている。このことは、時の楔通信以降の表現過程から示されているであろう。また、各号の記述内容について記すと、現段階で読み返してみて記述の補充の必要性は痛感するとはいえ、評価や判断の基軸を訂正する必要性はないことを再確認した。これは、いくつもの領域の活動記録の中に登場する人々への評価や判断に関わる記述について特に強調しておきたい。例えば、肯定的に記述していた人々の一部に対して、私がその後、批判を提起しているように見える経過があるとしても、それは、それらの人々が、かつての記述に対応するレベルの活動や発想を失いかねない事態への危惧として表明されているのであり、それらの人々への敬意と信頼の念は不変である。一方、記述の中で批判的に扱っているように見える人々についても、否定性を転倒する作業に共闘していく提起と共に記述してきたことは明らかであり、再会〜再共闘の姿勢は不変である。訂正リストを作成しつつ、このことを記し得たのをうれしく思う。

一九九四年　六月　　時の楔通信　気付　松下　昇

（通信第〈9〉号と概念集2の関連表現の掲載は省略します。…刊行委）

批評集β篇1〜2更新版への序文

更新に際して

更新の根拠と内容への註として記し始めると、刊行委は、批評集β篇3〜4を1〜2との対比において構成してきたが、3〜4を読みながら1〜2を改めて読み直したいという位置を想定すると、既刊の1〜2は、出現の気迫を放っているとはいえ、かなり読みにくく、構成も再考を要するのに気付いた。そこで、1〜2の原本を探し直し、ないものは既刊のページからコピーした後に、既刊の流れに対応して配列した。また、全ての記事についてではないが、必要と判断した場合には簡単な註を付けた。読みやすい配列や註のために、少し量が増えたので、1〜2から3〜4へ抽出的に再録した記事は、その註を付けて省略し、3〜4で読んでいただくことにしたので、了解をお願いする。

どんな表現を提出する時も気恥ずかしいものであるが、批評集の系列、特にβ篇は、そうである。しかし、監獄での身体検査や、手術台の医療を潜ってきた私は、それに耐えて関係や情況の真実に迫る責任もあると考えて作業してきた。時々は、解放感を含む笑いや読者の激励によって生き返る思いをしながら…。

β1〜2作成段階の楽しい記憶を最後に記す。87年〜88年には、京大A367資料室や裁判のテーマで集会をする機会が持続的にあり、岡山大の〜103出版〜での刊行が会議の当日までに完了せず、プリントしたページの集積を会場に持込み、円形または方形のテーブルの上にページ順に並べ、参加者が一枚ずつ取ってグルグル回りながら一冊分にまとめたものを最後のテーブルの上に置き、そこに待機している人がホッチキスで綴じて完成させ、入手希望者はカンパと引換えに受け取る…という光景があった。この作業中は、座ったままの討論という形態は中断されることになるが、逆に、作業や資料の手応えによる充実した〈討論〉の時間でもあった。いつか又、かつての参加者や新しい参加者と共に、より深化した形態で同じような作業をしてみたいと願っている。

〜一九九四年九月〜　刊行委　気付　松下　昇

（批評集β篇1〜2更新版について同文）

β1〜2更新版

あとがき

β1〜2更新版の刊行がβ3〜4の刊行によって具体化の契機をもったことは序文に記したが、β3〜4の刊行が契機となって開始されているのは、その他に次のようなものがある。個条書きにすると…

①各大学ごとの闘争経過、各人にとっての69年以降の軌跡の対象化
②β系の表現の向こうのマス（大衆）の位置や意味のとらえ返し
③β系の表現によっては把握しえないテーマへの接近

これらは、読者にとっても無関係ではないであろう。刊行委としては、さらに、
④資料の入手〜集積〜構成などの困難さが示すβ系パンフの特性、他のパンフの特性
⑤既刊かつ宙吊りのβ1〜2などの復元作業から視えてくる既成の宙吊り関係〜過程
についての応用〜止揚への契機を得つつある。

①〜⑤の全項目の共同追求や、これ以外の項目の提起に関して、読者の示唆と参加を期待している。

〜一九九四年九月〜　刊行委　気付　松下　昇

（β1〜2更新版に共通）

（批評集β篇3）

序文

現在まで刊行してきている形態のパンフレット群の最初の一冊は、87年9月の批評集β篇1に相当するものであった。そして、その段階では、現在までの同時平行的な各パンフの展開は予測していなかった。この二つのことは、かなり重要であるという気がする。

なぜ、87年9月の段階で批評集β篇1に相当するものの刊行を開始したのかをふりかえってみると、時の模通信の発行委託の提起（87年3月）の後で、時の模通信を出現させてきた必然性をより深く追求するためにも、一見それとは異質で対極的な表現に取り組んでみようとした。また、自分の表現や行為が、自分だけの総括としてではなく、現社会の多数の人々の眼に映っている像の確認〜転倒が不可欠である、とも考えた。

これらの予感的な構想の根拠については、すでにβ1やβ2の序文（後のページに転載する。）に記しており、その方向がα、β、γ…系のみならず、うら表紙にリスト化したような多彩な刊行につながってきていることを歓びをこめて確認しているけれども、これでよいと自足しているのではない。たえず自分の軌跡を、もう半歩でも超える努力を続けたい。そのように考えている私にとって、β1や2を刊行していた87〜88年の段階と現段階で何が連続し、何が異なっているのかを確認してみると、

異なっているのは、β1や2を刊行していた87〜88年におこなっていた〜103出版〜（岡山大学学友会気付）との共同作業が90年以降困難になり、連絡がとれなくなったので、その段階までに刊行し〜103出版〜の〈倉庫〉に冬眠しているパンフ群の活用ができず、印刷のために委託しておいた各パンフの原本も宙吊りのままなので、あらためて調査〜構成しなおさなければならなくなった。しかし、そのために、より読みやすいコピーを準備し、より立体的な構成と註を作成することが可能になった。昨年のγ6〜7と今年のβ3〜4について、このことは一層あてはまる。この成果をつくり出すために無意識の共闘をしてくれた〜103出版〜の80年代の共闘者たちに感謝している。また、かれらと別の場での作業を体験することにより、刊行の際にかれらが抱いたであろう感覚や、それを含む広範な活動の軌跡を以前よりも正確に判断〜応用できるようになっていることを記しておきたい。

87年〜88年段階と現在で共通していることは多いが、その一つをラセン状の一周性としてのヴィジョンとしてのべると、β2の序文で提起していた〈ジャーナリスト〉の概念に再び出会っていることである。参考のために、β2の序文と、私がβ2の序文で言及していた芥川竜之介の文章をβ4の2ページに掲載しておく。〈ジャーナリスト〉論は、殆ど注目されていないけれども、かれの、というより、かれらの時代が漠然と予感した〈未知なる情況〉と、それが引き寄せているイエスやハイネの像は、変換すれば、個別の人物論とか表現論を超えた領域で、私たちに大きい示唆を与えてくれることに気付いている。

一九九四年　九月

刊行委員会　気付　松下　昇

（批評集β篇3）

構成への註

1－β1～2刊行後に入手したβ系の資料を時間順に配列し、神戸大学闘争ないし〈闘争の重要な日付ごとに最低一つ以上の記事をとりだして掲載した。本来は一冊にまとめたかったが、量的な多さのためもあって二冊（β3と4）になった。

2－重要な日付ないしテーマについての記事が新しく入手した資料の中に見当たらない場合には、β1～2から再録した。従ってβ3～4を、あるレベルの闘争史ないし批評集として読むことも可能である。

3－前項は、〈私〉ないし任意の対象についての評価が、どのような振幅で生起しうるかを確認し、転倒していくための素材になりうる。この視点から、それぞれの記事に関して、いま構想中の反β系パンフへの契機となりうるような簡単な註をつけた。

補註－1でのべている「β1～2刊行後に入手したβ系の資料」も、まだまだ部分的であり、今後も刊行委として発見したり、つくり出したり（！）していくつもりである。

2でのべている補充の資料はβ1～2に限定した。例えばγ系の資料の中にも、γ6の冒頭のリストから判るように、本来はβ系の資料がふくまれているが、この複合～交差の関係は全パンフ～全テーマに拡大しうるので、今後の作業課題として残し、今回はβ1～2との関係に重点をしぼった。

3でのべている評価の振幅については、それ自体として考えるよりは、例えば五月三日の会通信や時の楔通信を読みながら比較してみる方が面白いし、有意義である。なお、小林秀雄の「解釈などでは変り得ない恒常的な人間事実はあるのだ」という『考えるヒント』中の「歴史」の項にある言葉（34年12月）を共感と批判の双方の座標系で想起している。

補註（続）－入手した資料は基本的に全て開示していく方針をとっているが、今回は掲載しなかったものがある。それは70年代のある時期に、神戸大学闘争に関わった人達がスーパーで金を払わずにジーンズを入手し、警備員の通報で逮捕されたという記事である。もし、この記事を手掛かりとして他のマスコミや大学当局が神戸大学闘争や、それに関わった人達を誹謗することがあれば、これに対する反撃の過程で記事を掲載することを考えてきた。しかし、これまでのところ、マスコミや大学当局の動きはないので、わざわざ、こちらから資料を提供してやる必要もないと判断して、このパンフには収録しない。

ただし、問題点は、より深く残っていく。いわゆる「万引き」行為について、かりに摘発されても公然と反撃し、その結果を引き受けていく姿勢を確立している時以外は実行しない方がいい、というのが私の判断基準である。また、70年代のある時期に、かなり日常的に？この行為に関わった人の、その段階での闘争・生活感覚との関連、その後の変化の対象化過程を一緒に展開したいと希望していることものべておく。

序文

この序文は奇妙な位相にある。β3とβ4の刊行は同時におこなわれた。いいかえると量的な問題のためにも二冊になったのである。従って、β3の序文は、いわば不可避的に記すのであるが、β4の序文は、本来は出現しなくてもよかった二冊の断面に、いわば無理やり出現させられているのである。何を記せばいいのか…

こういう感覚は、私がマスコミの素材に取上げられる時の感覚とどこかで共通していることに気付いた。つまり、私は本来はマスコミに出現しなくてもよいのだが、情況の断面に、いわば無理やり出現させられてきたのだ。そうであるとして、その力は、どのような情況的な欠損、どのような情況的誤題の過剰さから生じるのか、追求していきたい。

β4には、β3の続きとしての資料を掲載していくけれども、その前にβ3の序文で言及した芥川竜之介の文章を掲載しておく。それによってβ3〜4の流れの連続性が変化するならば、むしろ望ましい。表現集3のハイネ論を書いた頃から、様々の既成概念を破壊〜再生させている現在まで、不思議に何度も想起する文章である。

一九九四年九月　　刊行委員会　気付　松下　昇

追記－β3と4には〈あとがき〉がない（方がよい）、それはβ4の序文がその機能を発揮しているためであることにも気付いている。労力が省けたことにホッとしつつ…。

あとがき

β4の序文で、β3や4には〈あとがき〉が不要であると記してホッとしていたのであるが、その後、作業を続けている間に、β3の〈あとがき〉はβ4の序文で架橋的に包括表現されているから不要でよいとして、その度合だけ逆にβ4の最後にはβ3と4の総体に関しての〈あとがき〉がある方がよい、と考えはじめた。そこで、β3と4の作業の過程で視えてきたことをかきとめておく。

①β3と4は新しい資料だけではなく、β1と2からの部分的な再録資料との併合によって構成されているが、読み返してあらためて気付くのは、マスコミの記事は不正確で洗練されていないとはいえ、それ自体の中からマス＝大衆の判断の基準を探り、転倒していく手掛かりを与えてくれていることである。これまで刊行委が入手している資料は、報道され、読まれ（かつ急速に忘れさられ）たものの極く一部に過ぎないであろうが、それら総体に共通する前記の意味を、この作業を継続～発展させていく過程で追求し続けたい。

②各年毎に分けてマスコミ報道の量的な変化（記事数、行数）を見ると、マスコミの理解しうるレベルでの大学闘争の可視的なイメージの減少に対応して、基本的に減少の傾向にあり、それはβ3が主として69年から71年まで、β4が72年から90年代の資料を収録していることにも示されているが、しかし、個別のテーマについて時として急激に増加することもある。この関係は、批評集α篇の資料作成主体＝国家の場合には、より厳密な対応性を示してくる。しかし、α篇、β篇のいずれの場合も、表現主体の根拠は無意識かつ直接対応的な段階にある。このことを批評集γ篇の表現主体の多くは殆ど自覚していないようにみえるが、それではα、βの表現主体に迫り、止揚していくことは困難であろう。

③前記の①と②に関わるが、3と4の境界が71～72年であること、つまり71～72年までと以後の資料が量的にほぼ対等になっている事実性には、重要な変化（おそらくは、世界史の構造的変化と、それに対する〈　〉闘争の姿勢の変化）が媒介されていると想定して意味と応用方法を追求していきたい。このことは、時間や情況が等質～等速度で、また直線状に進行していないことにも関わっているであろう。また、β系で獲得した方法をβ系に交差しない軌跡や存在に応用しない限り、作業の意義は失われるであろう。この指摘は、刊行委としての方法的決意として、ここに記しておく。

一九九四年九月　　刊行委　気付　　松下　昇

註－β篇の記事は、マスコミ位相の松下に関する批評を軸としているが、具体的に松下の名を報道していない場合にも、松下ないし〈松下〉が事件ないし経過に深く関わっているものについては収録した。この方法は、③の指摘に関連するテーマ、とりわけ、α～β～γ～の批評範囲の差、全ての批評がまだ欠落している領域の提示…に応用していきたい。

後記

刊行の準備は基本的に11月初めに終了していたが、11月下旬の集会や公判に参加して、その経過を把握する必要があったことと、批評集β篇3と4や、1と2の更新版の印刷が9月以降も持続していることのために、概念集11の印刷開始が先に押しやられ、刊行時期を12月とした。このような体験は初めてではないが、今回は取り上げるテーマや刊行作業の過程に交差する力が特に強いことや、それらの力がバラバラに交差せず、包囲するように作業を支えているのが特徴的である。

構成は、概念集8あとがきでのべた、表現情況からの逆作用の動きと効果に注目し、方向は、概念集10序文でのべた、初めて出会う人々との共同作業の契機に注目し、予測は、概念集12総体との対応ないし対偶である関係に注目している。注目、という他人ごとのような記述をしているけれども、作成〜刊行主体ないし視線〜態度が加速〜拡大している感覚、これまでの達成を踏まえつつ超えていこうとする意欲の表現として適切であるという気がするので、このままにしておく。

ともかく、自足せず、怖れず、たゆみなく進んで行こう！読者の方々も。

〜一九九四年十二月〜　　刊行委　気付　松下　昇

註1－11月下旬の集会や公判とは、ナターシャさん母子、爆弾闘争に関連する捜索、死刑執行阻止（このページ右に転載した「救援」10月号の記事参照）、両親殺傷事件（概念集10の27ページ参照）などに関連している。これらの場へ参加しつつ、それぞれの場の問題自体は勿論重要であるが、それらに共通〜重層し、はみだしている問題領域への気付き方が、だれにとっても不充分である、という印象が切実であった。気付き始めた私の反省と決意として記す。

2－目次を作成している段階で、目次の文字の配列が〈楔〉になっていることに気付いた。これは意図してこうしたというよりは祝福として受け取っている。ワープロで表現する場合に、画面に残った行数から終わらせ方を決めることや、残り時間から規定されて発語する（など）との対比と応用も考えている。

3－この号では〈序文〉なしに、いきなり展開したので、この号の〈後記〉は〈序文〉の役割をも帯びている。概念集シリーズを含む全パンフレットを見渡して、〈序文〉と〈あとがき〉のどちらかがない場合がいくつかあることにも気付いている。〈他人〉ごとのように…。

内容や刊行過程についての質問〜提起などは左記へご連絡下さい。（概念集9や10の〈あとがき〉に記したような不確定状態にありますが、連絡は可能です。）

〒657　神戸市灘区赤松町一の一　松下　昇気付　刊行委員会

☎とfax　078・821・4984

刊行リスト（定価はなく、読者の何らかの表現と交換するのが原則です。ただし、共同作業のためのカンパは歓迎します。）郵便振替口座＝01150・3・42929

松下　昇（についての）批評集

α篇1（88年10月）、2（89年6月）、〜…α系は国家による批評

β篇1（87年9月）、1更新版（94年9月）、2（88年9月）、2更新版（94年9月）

3（94年9月）、4（94年9月）、〜…β系はマスコミによる批評

γ篇1〜4（87年11月〜88年3月）、5（88年11月）、6（93年9月）、

7（93年9月）、〜…γ系は個人による批評

表現集1（88年8月）、2（88年12月）、3（94年4月）、〜

発言集1（88年9月）、2（88年12月）、3（94年5月）、〜

神戸大学闘争史ー年表と写真集ー（89年5月、その後さらに更新中）

神戸大学闘争史ー別冊1（93年4月）、別冊2（93年4月）、〜

〔3・24〕証言集・上巻と下巻（89年12月〜90年1月）、〜

菅谷規矩雄追悼集（90年10月）、〜

救援通信最終号（91年5月）、〜

〈6・20討論の記録ー不確定な断面からの出立ー〉（91年10月）、〜

正本〈ドイツ語の本〉（77年9月）

五月三日の会通信1〜26（70年7月〜81年12月）、訂正リスト（93年5月）

時の楔ー〈　〉語に関する資料集ー（78年10月）、時の楔〈の／からの通信（87年9月）

時の楔通信第〈0〉〜〈15〉〜号（78年10月〜86年7月〜）、訂正リスト（94年6月）

概念集1（89年1月）、2（89年9月）、3（90年5月）、4（91年1月）、

5（91年7月）、6（92年1月）、7（92年3月）、8（92年11月）、

9（93年11月）、10（94年3月）、11（94年12月）、〜

序文とあとがきから見た既刊パンフのリスト1（93年1月）、2（95年1月）、〜